

和 崎 春 日*

WAZAKI Haruka*



高英求の流動性理論とアフリカ・フィールドワーク認識論の照応と交響

—『貨幣の制御』をめぐって

Philosophical Resonance between KOH Youngku's Liquidity Theory and Cognitive Ontology of Fieldwork in Africa

— with special reference to his recent book, “Managing Money”

はじめに

—本論の内容と高英求『貨幣の制御—流動性の理論・思想史』が示す学制的オリエンテーション

30年来の、それ以上の、長い年月をかけて貨幣論、流動性論を研究し続けてきた高英求の『貨幣の制御—流動性の理論・思想史』(2020年、文眞堂、以下、本著と記す)を、本論は、評して紹介しつつ論を進めるものである。長年の研究内容をこの紙数で紹介するのは失礼であり、また困難でもあるが、経済学・経済史・思想史の専門書を、アフリカをフィールドに文化人類学を学んできた者が重要と捉える本著の主張点の要諦を抽出し、アフリカ人類学の徒からなりの紹介・呼応をおこなって、共に学ぶ者の研究指針としたい。この高英求の研究結実に、私の、現在、過度ほどに自由を認める資本主義の極致にある時代状況、ネオリベリズムの中でのアフリカ研究やそれを肉付けるフィールドワーク論を付加させる形で複合化し、高英求論と私の研究とが照らし合うような対照・往復の学制的コミュニケーション呼応を目指す。それが本稿の内容(対象)と目的である。本著の要点抽出、解きほぐし、紹介を、まず私の視点から論評を加えつつ表出する。その後に私のアフリ

カでのフィールドワーク姿勢・「構え」論を付加する。私のフィールドワーク論が説く「構え」は、質と中身の体得過程だからである。高英求が本著で「人と学問」のように諸理論を人間洞察と概念と結びつけて叙述する、その理論化の積み重ねスタイルとそこにある構え、つまり、高英求の哲学は、私が説くフィールドワークの構えと呼応する。なお、本論では、高哲夫も登場するので、高英求と常に表記する。

高英求『貨幣の制御—流動性の理論・思想史』は、これまで経済史・思想史の中では、傍流に押しやられていた貨幣論・貨幣経済論に注目した著書である。経済学の主流である新古典派は、物々交換をモデルとして、貨幣は交換の仲立ちをするに過ぎないと措定する、という。貨幣が暴走して世界で大小さまざまな問題が起こっているのに、である。およそ非現実的な貨幣観である。貨幣が投資先を探し移動する。この行き過ぎである投機は、見張らなくてはならない。貨幣の流動性は、活性化にも恐慌にもつながる。そこで貨幣論を論じるのだが、ここで、高英求は、今日までの主流経済学で原理的に欠落しているのは、富としての貨幣、そして社会制度としての貨幣、という視点である、と指摘する。本著は、一貫してこの複合化視点のなかで貨幣

*中部大学名誉教授

論を追及していくことが、「序章」で述べられる。

複合化視点ということでは、一国レベルの狭い分析ではなく、さらに対等な国と国などという現実を直視していない、したがって、標語のみで、そこでの問題点が置き去りにされた伝統的な「国際経済学」の視点を相対化していく必要がある、と説かれる。高英求は、ラウル・プレビッシュが焦点化した「中心」(先進国)と「周辺」(途上国)の不平等な関係性へのテーマ化を發展させ、これを貨幣論と結びつけて複合視する「世界経済論」をここで論じている。

「対等な国と国」という関係は、世界を構成する要素として国家に上下がないという理念を謳っているわけだが、その名のもとに、どれだけ、これまでの歴史的な収奪を反故にしてきたか、は問われるべきである。スローガンと国際実態とは異なる。植民地化以後独立を果たしたアフリカの国々に旧宗主国が「対等」な関係とそれに見合う義務・責任を求めても、元々の歴史過程における植民地に蓄積された経済的・政治的・心理的不利益(各人の尊厳の侮辱を含めたアイデンティティ軽視)や、スタートアップに至るまでの条件不利の整備・補強を、植民地化の結果の果実を繁榮に結び付けた旧宗主国や北側の developed 既発展社会・欧米日のほうが自省による義務・責任として果たさない限り、スタートアップ以前の対等関係が整備されていないことになる。

「対等な国と国」などという美しいがその実態は逆のこの言葉は、大きな問題をはらんでいる。ネーション・ステートには矛盾も多い。それは説得力がない。また、要素(国)と要素(国)に均質な対等・平等を人為的に想定・捏造できてしまうから、この要素を乾いた関係で数値化できてしまう。実際は。この要素は歴史的実質の質、社会経済的に独自の文脈の質によって立っている。計量でことが考察されない大きな部分がある。植民地関係は、経済的、政治的に、

ネーション・ステート国民国家の中に押し込められ、したがってそれに伴って心理的な人間無視として心理的に、コロニアル心性は勝ち誇ったヨーロッパ・日本人にも、傷つけられたアフリカ・アジアの民衆心意の中にも歴然と宿っている。植民地から解放され多くのアフリカ植民地が独立を果たした1960年「アフリカの年」以後も、植民地状況は生きている。思想史で言うポスト・コロニアルである。それが日常のふとした言葉の端々に出る。深い傷を負わされる。「対等な国と国の関係」SDGsも標語に留まらない歴史検証を要する。なので、後述する。

流動性論は、アメリカの均衡論以上に、歴史や社会構造を重視する経済思想と親和的な面があり、歴史に根差した貨幣のダイナミズムを捉える利点があるとともに、他方、同時に、制度や権力との関係をどうとらえるか、という貨幣を支える権力への注視が大きな問題となってくる。これを、主流派経済学は貨幣の中立性から出発するので、理論的に避けて通ることができる。これを高英求は問題にする。つまり、このテーマは長く論じられることが稀有であり続けたということであり、その掘り下げにこそ、本著を著した高英求のオリジナリティがある。中立性つまり乾いた対象・手段である貨幣と捉えるなら量的に扱いやすいが、そのみに高英求は留め置かない。意味を問うのである。

量的な分析ばかりに走る現代経済学的主流に対する、本書は痛切な批判でもある。例えばA.A. パーリを高英求が取り上げているのも、爆発的に伸長しうる証券市場の力に拮抗する新たな力の創造の必要性が、パーリにおいて論じられているからである。証券市場の力に拮抗し、これを抑制しうる新たな力の創造が求められる。高英求は、economyの原点に立ち返り、アリストテレスのいう、限りあるオイコノミア economy が、限りない、必要性を超えて富や財産を求めるクレーマティスティケーに脅かされ

ている現状を現代の問題とする。この課題化を、高英求は、無限の欲望を実現するもの（＝貨幣）を無限に欲するクレーマティスティケーは、貨幣論の射程のなかで、短期的な社会経済の活性化ではなく、「社会を守るために」（高英求）追及されねばならない、と説いてその確認のもとに本著は出立するのである。

指数が限られ私の要約も多いので、本著の何ページに書かれているかの参照は記さずに、何章の論述かの章単位でレファレンスを示すものとする。

第1章 バブルの古典理論—ジョン・ローの貨幣論—を解きほぐす

今日あるバブルの動態は、歴史的にこれを捉えて参照することができる。証券と銀行信用が結びついた金融危機は目新しいものではなく、15～16世紀にすでに金融取引所が出来て巨額の金融取引がなされていた、と本著で学ぶ。1720年にパリとロンドンでミシシッピ・バブルと南海バブルが起こっている。高英求は、このミシシッピ・バブルの立役者ジョン・ローに焦点を当てて論じる。ローの貨幣量のみに注目する手法を問題とする。貨幣がはらむ重要な問題は、その欲望に限度がないことである。序章で高英求が取りあげた。アリストテレスの言うクレーマティスティケー欲望無際限である。貨幣への需要に限りがないのだから、これを相対化する視点を持つ「普通」の常識あれば、これを聞いただけで問題はすぐに直視できたはずだろう。

ローの目的は、権力によって新たな制度を構築して、貨幣需要を人為的に創りだし、それによって貨幣量を増大させることであった。経済発展上、後発のスコットランド出身のローは、先進の金融中心地ヴェニスやアムステルダムに赴き、金銀の財・手段が少ないスコットラン

ドで、経済伸長するための手段を考える。そのために刷れば増やせる紙幣が案出されたという歴史経緯を私たちは学ぶ。これは、そのときまでの貴金属中心の重商主義への批判的展開だった、と高英求は史的解説を施す。

紙幣重商主義を導いたという点では、ヘクシャーの論と共に、ひとつの画期を成した。高英求の貨幣の価値解説に私たちは合点を得る。すなわち、貨幣は、その内在的価値、つまり素晴らしい上質の紙で出来ているとか、その印刷の技術が世界一の美術性をもつとか、によって何かと交換されるのではなく、何かと交換できるから価値をもつというのである。ここから、計測可能、管理可能な論へと展開していくことも可能になった。また、その管理が必要にもなった。ここで、ローにおいて、一国内の貨幣量拡大が国際金融面でどのような反作用をもたらすか、の考察を欠いていたことは否めない、と高英求は批判する。需要という概念と貨幣とを結びつけたのは、ローの理論上の功績であるが、ローの需要論が実態のない「仮想すぎる」ものだ問題視される。アダム・スミスのロー批判を高英求がすぐ続けて述べるように、需要が有効需要、すなわち「支払う意志のある人々の需要」、つまり、あくまでも現実の購買力をアダム・スミスの国富論は対象としている。したがって、これは労働の賃金論にも結び付き、下層労働者の生活条件に論が届くもだと、高英求の解説でローとアダム・スミスの対比をなす特質を知ることができる。

紙幣重商主義の延長線上には、金銀ではない実態に立脚しない不安定さ危うさ、ひいては幻想が常に付きまとう。バブルは幻想なのに、それに政治権力がお墨付きを与えると、あたかも実態化して社会全体を破壊に向かわせる。巨大バブルは、国際投機と結びついていることを見逃してはならない、と高英求は警視を注ぐ。ガルブレイスに随伴して高英求が評価するよう

に、ここに普遍化が伴わないわけだから富の自己集中は早く、ローはまちがいなく「金儲けの天才」だろう。文学においてもゲーテが『ファウスト』で言わせている揶揄的台詞が、ジョン・ローのミシシッピ・バブル論への批判として模されていることを、高英求は引き出し、台詞「どんなに空想が高く飛翔しようとも、この富には追いつけない。高邁な見識を持った人間なら、無際限のものに対して、無際限な信をおくことができる」と引いて、ミシシッピ・バブルと南海バブルの錬金術ロジックの詭弁性を非難するのである。

ただ、高英求は、ローを近現代の歴史ステージで言う、心意としても偏狭で一国内利益に閉じるナショナリストだったか、というところではないだろう、と心意としての「悪徳ナショナリズム」（評者ターミノロジー）にはつながっていなかった、という一定の批判の歯止めは掛けている。この点を、ケインズが、増大する流動性資産が群集心理によって売買される経済システムの危うさとして批判したこと、つまり、ローイズムを批判したことを、高英求は受けて、繰り返される金融危機を社会と人間と歴史との関係のなかで考察することの意味を問うのである。この設定と姿勢、学の構えに首肯する。

第2章 利害対立と信用管理—J.R.コモنزの通貨管理論を解きほぐす

ケインズの考え方は、経済学における一つの参照系、つまり、関連付けて論を展開する大本になり得る。ケインズの『雇用・利子および貨幣の一般理論』は、しばしば参照される。なので、ここでは『一般理論』と短縮形で述べる。ケインズは、資本主義を本質的に不安定なものと認識しながらも、マネーの暴走と投機を抑え、公的なチャンネルで投資の社会化を行うことで、あくまでも自由主義的な経済システムを維持す

ることを提唱した。高英求は、モンテスキュー『法の精神』とケインズの『一般理論』とに通底するものがある、と説く。このことは、終章において再度、深く取り上げられる。モンテスキューが、ケインズも重要視した証券や、土地と動産に注目していたことを捉え、人と富が国を超えて移動していく歴史的な動態を捉えて、暴虐や圧政から逃れた人たちが、ヴェネツィアやオランダなどで商業を発展させた、と高英求は解き明かし、商業のもつ平和達成や経済繁栄の機能を指摘する。これがケインズの主張だが、J.R. コモنزも同様な問題意識を持っていたと高英求は引き合いに出す。したがって、コモنزは「制度」経済学のパイオニアの一人と呼べるという。

アメリカの金融資本主義は、1929年に絶頂に達し、あとは崩壊に向かった。その際、ヨーロッパでは革命を回復の手段とする社会も現れた中、経済だけの問題にとどまらず、民主主義を突き崩すに至ることをコモنزは恐れた。コモنزは、物々交換をモデルとする経済学を批判し、取引されるのは所有権だという優れた洞察をもっていた、と高英求は評価する。債務を商品のように売買する銀行システムが巨大な力を持つに至ったが、これが戦前経済の資本主義の到達点だった。これは現代にも通じる慧眼である。

コモنزは、科学技術史的にも、資本の結集との係わりがあることを認識していた。彼が20世紀の資本主義の特徴が「何百万人もの投資家が保有する膨大な貯蓄にあり、大量の機械と大勢の被雇用者をファイナンスして、科学と発明、そして世界規模の市場とによって活用できるようにするために、その貯蓄が結集されているのは間違いない」と述べることに、高英求の鋭いフォーカスが働く。

ここで私が本書や著者・高英求に共鳴しここから同様な問題と考えているのは、科学や技術

の発展や発明といった先進性や客観的な「純粹」の「正しさ」が、とにかく数値化された表現手法で表出されることが多いことである。またそれは民衆を「6〜7割がた」納得させる、何かその3〜4割の残余の不安さ、後ろめたさ、納得できない何かを放置したまま、厳しく言えば「目眩ませる」には手頃な方法であり、資本主義とつねに結び付く契機を持って、後ろめたく非社会的で偏狭な利益に結託することがごく普通にある、ということの再認識である。量さえ保証されれば、その量の一つ一つを意味づける質が問われないことは、人の生き方を踏みにじり得る。市井にいる「普通」の民衆の生きる営為に「行使できる者」＝権力の賛意と助長と促しが届かなければ、社会は爆発に向かう。9.11はそのことを物語る。日本にいる私たちは、ウチナーやアイヌや部落や在日への伴走をためらい、ここ数年〜10年のうちにまさに量的に追い抜いて世界最大の宗教人口となるイスラーム人口の内実を見ようとも語ろうともせず、何百万のシリア難民への言及・係わりは最初から少なくそして消え、圧倒的なイスラーム不理解を放置したまま、しかしウクライナへだけは西洋の合唱にあわせて手を差し伸べる。

中部大学のSDGs—reconsidered

SDGsの合唱が日本でも大声で謳われそれがアフリカへも「参加強要を迫り、参加しない奴は極端な利己主義者」と断じる暴力性への懷疑や自己反省は求められてよい。そう言って先に発展した欧米やこれにくつつきたかった日本などは歴史的に「アフリカはこれが矛盾だよ」「君たちの社会努力はこれが足りない」「これが遅れている」「こんな非合理や非科学をやっている」と称して、現在日本にいるアフリカ人留学生のお爺ちゃんお婆ちゃんやオジさんオバさんたちは指導を受けた。そう言ってその不足部分を「補う」と称して、植民地化された、と彼ら

/彼女らは言う。北側社会は南側社会の環境論不足を嘆く前に、自らのアジアへの歴史暴力と自己社会の環境破壊を地球上での罪として自己省察を行うことが普遍化への道筋であり、アフリカの不足など謳う前に、四日市ゼンソクや水俣や糸魚川水銀を客観的に、かつ、主観的なストーリーに意を流し込んで語り、自らの暴力により自ら被害を受けたと表出する姿勢から発するなら、世界はその自己制御と省察の姿勢と力が普遍性をもつものと受け取り、南北地球の人のびとに繋って届くだろう。

大学カリキュラムや高校授業で大きく関連タグ付き授業が増えているが、中部大学の授業にSDGs タグが付くなら、環境・自然科学のみならず社会的・歴史的破壊も含めて、アジアへの経済進出の植民地化史を問う姿勢が含まれていなければ意義は薄いだろう。単なる知識の集積なら、シンプルすぎる。し、それが「アジア・アフリカの首都でこんなにプラスチック（ビニール）袋が路上にあふれている」などといった、他者の非の集積なら、余計に問題は大きい。それが、植民地化の論理と物言いだからだ。大学で問うべきは自他を繋いでいく姿勢であり、その出発点は自らの「生きる構え」であるはずだ。その自他は、南北のなかでは非対等、不平等のなかに歴史的にあり、それは現代史的にも決して解消されていない、という認知と自者から問うていくイニシアティブと痛い自己批判性を要する。北側や先進諸国、本著で言う「中心」がとにかく持たない自己掘り下げなしに、ナイーブでポストコロニアルな植民地的暴力に充ちた、地球と称して他者の非を問うなら、表面は「善」を謳いあげる純朴な態度に隠された、意識されない善良顔の差別性を自ら顕在化している。これは私自身継続的な戒めを要する、陥りやすい陥穽である。これを自省し相対化する、意識的な、コモンズ論と高英求論に共鳴しこれを受け取る必要があるだろう。

量的な「善」の合唱授業のレパトリーの奥底にある、それぞれのSDGsの内実のストーリーの質を反映してより広い人びとの「雇用」に匹敵する南北地球の庶民層の至福に、意が届く語りかけと意の往復を、1万人量的大学となった中部大学で、学府としての発信語りの意味と質と奥行と哲学が問われている。

本書のこの章は、世界経済が決して調和的ではなく、厳しい利害対立と交渉力格差が存在することを知らしめた。それを可能にしたのは、自己を相対化した視点である。産業発展の極致から離れて、途上国の立場から先進国中心の世界的構造を批判したコモンズやそれに共鳴した高英求の学究は、普遍を見つめている。

コモンズがめざしたのは、国際的な南北の不平等だけではなく、国内の階級間の不公正の是正でもあった。ただ、古典派もマルクスも利害対立を焦点化するのに対して、コモンズは、諸利害の対立と同じように、またはそれ以上に諸利害の調和にも大きな比重を置いて考察していたことを、高英求から学んだ。したがって、コモンズは、「相互に依存し合う利害」という概念を用いたし、マルクスとちがって、利害対立は克服不可能なものとは捉えず、階級対立が激化して不可避免的に革命を惹起するとは考えないのである。マルクスの急進性に対して、コモンズは漸進的な事態打開が特色的だと、高英求は対比する。一方で、この矛盾に対して即効性ある対応が図られない、という現実追認になりかねない側面を、高英求は忘れずに指摘する。コモンズは、急進的なストライキよりも、漸進的な団体交渉を支持するのである。

こうしたコモンズの緩やかな社会改良の方向性は、アメリカにおける新しい経済学と新しい社会学を創り出そうという運動と結びつき、それはキリスト教のソーシャル・ゴスペル（社会的福音）運動と、密接に関連していた。高英求は、

高哲男（『現代アメリカ経済思想の起源』2004年）を引いてコモンズの経済思想を「国家＝公共の力を利用しながら、より高次の自由を実現しようとするリベラルたちの知的な社会改良運動の一環であった」とひも解いている。ただ、コモンズの良さは、経済社会を予定調和的に見るのではなく、つねに利害対立が存在して力の格差があることの確かな認識をもっていることであった。

このことを、高英求は、マルクスとコモンズとの比較考察で解く。利害対立を法的なアプローチで徐々に解決しつつ漸進する、という事態の打開を図る、とコモンズは「安定的」「調和的」解決指向を想定する。利害対立は、マルクスにあつては解決不能でその矛盾が膨張し革命という変革にまで迫るわけだが、コモンズにあつては、階級対立が不可避免的に激化して革命という大きな社会変革に至る、とは捉えない。漸進的微調整解決の連続を想定していた、という。この際、交渉力が問題になるのだが、企業側から見た「適正の交渉力」に労働者のそれをとどめておく、といった中庸性があるとも言え、この点に高英求は一種のヌルさがあるという指摘を行っている。

その意味で、コモンズの「平均的人間」「平均価格」といった枠組みからもわかるように、「平均」重視の姿勢と、一貫性がある。このような斬新的解決法を取ると、既得権者の利得はそのまま据え置かれ、長く矛盾や格差が放置されたままになる、という欠点があるとも高英求は解く。しかも、この平均像から、特徴ありと印づけられた特定の人間カテゴリーは埒外に置かれる。その意味で、高英求が明記しているように、アフリカ系「黒人」への埒外化には、今日から見れば普遍性への限界を感じ取る。コモンズは、「黒人の解放」も急峻すぎた、という捉え方をしている。コモンズによれば、アメリカへの移民のなかでも、他の人種は「我々の

制度」に接触することで文明化されてきたが、黒人は「飼ひ慣らされる」domesticatedのみである。解放されるべき、平等がもたらされるべき人間の範疇の問題が存在し、誰を人間と認めて枠内に入れ、だれを救済対象＝平等化対象の埒外に放り投げるか、のなかでの人間普遍性に限界があった。

アングロサクソンのコモン・ローの世界をコモンズは高く評価した。南北戦争後の黒人の解放（市民権と参政権の付与）は、時期早尚であった、と強く主張した。アメリカの民主主義理論と政治体制は、アングロサクソンが発展させてきたものであり、法の下での平等という権利を活かすには、それ相応の能力が必要とされる。そう述べて、黒人の能力を否定的に見たのである。コモンズは、通貨管理は、公的な性格を持つ組織が行うべきである、という立場をとっていた。この点の特異地点に立つ利害から一つの客観性を留保して普遍性を確保しようとしたコモンズを、高英求は、高く評価する一方、その政策が及ぶべき人間範疇論では、驚くべき批判点が存在する限界性の指摘を明確に指摘している点が、著者の人間解放の精神を物語るものである。

第3章 流動性と権力—A.A.バーリの人為的流動性論 を解きほぐす

バーリが、流動性資産の拡大を、多くが楽観的に見る中、アメリカの経済社会や政治を変えてしまう危うい性格をもつものと捉えていたことを、高英求はまず抑える。しかも、この流動性資産の拡大は、最高権力の支えがなければ促進されえないことを、高英求はバーリとともに確認する。流動性を支えるのは権力なのである。

バーリ(1934“Liquid Claims and National Wealth”『流動性債権と国富』共著者ペダーソンも含めて)は、19世紀末から20世紀初頭にアメリカ

の流動性資産の急膨張を支えたものは何であったか、という問題を追求し解き明かした。これを受けて、高英求は、流動性資産と制度との結びつきを説いたこと、そして、流動性資産と権力との結びつきを説いたこと、の2つをバーリの功績として挙げる。特に、後者の流動性資産と権力との結びつきは、制度との結びつきを論じた研究が他にもあったのに比べて、まさにバーリの独創性を特徴づけるものとなっている、と指摘した。

バーリの論を汲んだニューディール政策により銀行システムと証券市場に対する国家の管理が強化され戦後アメリカの経済社会の安定に大きく貢献したのだが、これを1980年代以降に、ニューディール政策が見直され自由度が高くなると、再びバーリが警鐘を鳴らす事態が惹起されてくる。2008年に、世界金融危機が起こった時想起されたのは、百年前のアメリカの金融恐慌(1907年)であり、1929年のニューヨーク株式市場の大暴落と大恐慌であり、その共通項は対象として分析されるべきだ、と高英求は促す。ここには投機的な証券投資や流動性資産の過度の追求があった。金融危機に際する研究でよく論じられたのは、貨幣量の事後的な拡大である。ここで危機の構造的な要因分析がされていない、と高英求は批判し、その探求へと向かった。ここに、現代の主流派経済学の陥穽がある。市場は所与のものや自生的なものとされ、その人為的性格に分析が入らない。これをバーリを再評価することによって、高英求は危機の構造的な要因考察へと向かったのである。

そこでまず、バーリ＝ペダーソンは、流動性資産の拡大の実態を捉えた。流動性資産の量的な算出の方法は近似値でも良しとする蓋然性あるものだが、年々の変化を捉えるのにその趨勢や傾向は析出される。それによると、19世紀末から大恐慌までの間に、アメリカで流動性債権が膨張している。全体の国富に占める流動性

資産の割合いが、1880年～1912年の間10～20%だったものが、1920年代に入ってからわずか10年の間に25～40%へと急増している。1922～1932年までの10年間の流動性債権の増加額は、アメリカ史上の最初の150年間の増加に等しいほど急峻な増大である。大恐慌や危機にいたるまでの、この実態分析から問題を提起する意味は、大きい。

こうした流動性への注目は、バーリ以前に、モルトンらのシフトバリティ論によっても、またこれに同調したミッチェルによっても、なされていた。シフトバリティ理論にあつては、イギリスとは事情が異なりアメリカでは、資産を短期で売却・移転できる能力こそ重要だとされた。パニック的な預金払戻しに備えて、流動性資産（証券）を多く持つことが善し、とされたからである。ここでは、証券を通じて長期投資に向けられたマネーも実質的には銀行信用だ、という的を射た指摘が登場した。

貿易国イギリスに比べて後発国のアメリカでは、農業や産業を育成しなくてはならなかった。そのために長期金融を推進する必要がある、それには債権を流動化することによって、個々の銀行のリスクを減少させなければならなかった。シフトバリティ理論は、こうしたプロセス分析に依拠しており、FRBの設立がその成就の形であった。

バーリ＝ペダーソンの研究を、流動性が権力によって生み出され維持される、ということをも明らかにした点において、高英求は評価する。自然に生まれているものではなく、人為的に創生されるという意味において、かれらはこの性質を「人為的流動性」と呼んだ。流動性における人為性のシフトバリティ以上の強調が、バーリ＝ペダーソンの特徴である。この人為はまさに立法や政策によるものだとして2人は主張する。流動性は、証券市場に支えられ、社会的慣習によって維持され、最終的に最高権力（主権）に

よって支持される、という重層的な人為性が認められることを析出していた。自己流動的な視線はイギリスで発展し、真正流動性と呼ばれる。対して、人為的流動性は、金融制度の形成過程で「人為的に」創出された流動性であり、株や債券、抵当証券などがその代表例とされる。ここでの含意は、今まで現金化できなかった資産の換金が可能になったというところにある。人為性が生み出す資産化の広がり大きい。制度にも人為的流動性の結びつきを認めるばかりか、バーリ＝ペダーソンは権力との結びつきを理論化していたところに、シフトバリティ理論以上の制度的、公的な関与分析の進展が認められる。高英求は、流動性の制度依存性に加えて流動性の権力依存性の考察がバーリ＝ペダーソンで出現したことを評価し、またその分析の必要性を確認、主張するのである。

ここで、2つの機能を比較しなくてはならない。それは、危機時に、1913年の連邦準備法によるFRB（Federal Reserve Bureau）が登場して支えるというのと、他の論者、フリードマン＝シュワルツなどが「最後の貸し手」の出現によって救済措置が成るという意味は、さほど大きな違いはない、と高英求は言う。だが、危機に先立って、その権力が流動性をむしろ生み支えてきた、という側面への注視には、大きな意味を置いて高英求は論じるのである。ここで、私たちは、高英求論から「流通特権」というターミノロジーを学ぶ。流通特権は、特定の資産に流通特権を与えると、請求された特定比率の通貨がその請求者に支払われるのである。流動性資産を社会に流通させるということは、危機時でもいつでも、通貨に換える仕組みを保証するということであり、それは最終的には最高権力（主権）が保証するしかない。こうして、2009年の世界金融危機などに際して、中央銀行が私企業手形などコマーシャル・ペーパーを買い取る策に出るという形で、権力はいわば流

通特権の対象を広げて、制度と実態を促進し保証し助長してきたのである。

資産流動化は、それにともなう集合的な感情の潮流に左右されていく、という負の側面と表裏一体をなしている。ここで、消費なら雇用や賃金の改善に結びついていく。が、証券投資が過熱して証券価格が高騰しても、資本財投資や消費が伸びていくわけではない。これが問題だ、と高英求はバーリ＝ペダーソンに同調して批判点を指し示す。したがって、高英求によってバーリ＝ペダーソンが評価されるのは、あくまでも、富の流動化を自然とし大前提としつつも、そこに国家の介入を強化することで、証券市場や社会そのものを変革しようとするところにあった、と要点を捉える。

その意味で、政治と経済は分かちがたく結びついている、という観点は、バーリとケインズと高英求を繋ぐ意識である。ここで、興味深い「財産」論を、バーリは展開している。財産は知識のような無形（intangible）なもの、土地のような有形（tangible）なものに分裂し、その総体を、財産（property）と呼ぶようになった、という。この分析は、その後の知的ソフト社会の出現をも予測する方向性と未来予見性を内包するものである。この考察から導き出されたのが、法律上の不動産（real property）と動産（personal property）であり、その後者の中の請求権としての債券や株式である。これらの財産は、譲渡可能であり流動的である。流動性資産の保有者は、国家の統制下におかれていることを、高英求はバーリとともに再確認する。

そこで、流動性資産の拡大と政府によるその流動性維持政策に正当性はあるのか、が問われる。正当性とは権力や財産が共同体（community）によって正当なものと認められていることを意味する、という指摘は重要だ。さらに、制度というものは、道徳的な基盤のうえに築かれた幅広いコンセンサスに従うものだ、

というバーリの言葉を抜いているのも、重い。

流動性のメカニズムは所得再分配の機能を有し、ここにアメリカ民主主義がもとより持たない、不平等を平準化に向かわせる、富の再分配機能を認めこれに期待した。だが、実態は、株式保有の大部分は裕福な全世帯のおよそ1割の上流階層に集中している。バーリとドラッカーは、反共と時に明示することがあっても、革命というタームを堂々と使用する平等志向を有していた。その意味で、バーリは、理念として平準化平等化の思想を抱いていたが、その理論には一種の楽観主義があると評せられても致し方ないところがある。それでも、バーリの理論が現代、意味を持つのは、かれが目指したのが、金融システムの性格を「私」から「公」へと変革することであった、と高英求が総括することに首肯する。政策実際としては、銀行と証券の間に垣根が儲けられ、強力な証券市場への管理体制が敷かれることになった、という形でバーリ論は顕在化した。経済上の徹底した自由放任主義に挑んでいくとき、「改革によって権力を削がれる人は命あるかぎり権力構造の変化を許さない」というバーリの言辞を引き合いに出す高英求は、アメリカの経済変化を、政治闘争としてそのストーリー構造を読み解くことができることを、バーリ論を通じて示した。そこから、高英求が経済と政治と生き方の不可分結合性を強く主張する哲理の声を、私たちは聞きとる。

第4章 流動性と制度—ケインズの自己 利子率論 を解きほぐす

ケインズの流動性概念は、流動性資産への強い執着に対する批判のベクトルを持つ。

ケインズの『一般理論』の核心は、不確実性が支配する世界で、貨幣が経済機構全体の中でいかに特殊な役割を果たすか、という問題を解明することにあつたと高英求はまず規定する。

ケインズは、流動性選好という概念を導入するが、これは、豊かであるはずの社会に失業と貧困をもたらしてしまう貨幣の特質を問うためである。この核心を単なる利子率の問題に期する研究が多い中、雇用促進的な投資と利子率に関する研究は、広いパースペクティブで再度、流動性論そのものに立ち返る必要がある。高英求は、そのように立ち返って根源的に問い直す。

ケインズは、今までの通説とは異なり、利子率を、貯蓄あるいは待従への報酬と捉えるのではなく、流動性を手放すことへの報酬と解釈しなおした。ここで重要視されるのが、個人の心理選択である。2つの意思決定があり、1つは消費性向、所得のどれだけを消費に回しどれだけを将来の消費に備えるか、というものである。もう1つが流動性選好である。これは、どのような形で保有するのを好むか、すぐに支払える貨幣あるいはそれに近い形で持ちたいかどうか、の選択である。利子率とは、貨幣に対する支配権を有する債権と引き換えに約定期間手放すことから得られる金額の逆比であることを、本著から学ぶ。

貨幣を保有する動機をケインズは3つに分類している。①取引動機（取引のための現金の必要性）②予備的動機（将来用の現金）③投機的動機（市場より多くの知識を持つことで利益を得ようとするもくろみ）である。貨幣の数量的側面からの分析から離れ、流動性から分類しなおしている。これを引き継いだケインジアンには、この選好理論は重要度をもって省みられていない。ケインズには、投資家の資産選択という動機があることが極めて意味ある論点であり、実際、人々の動きはこの心理の占めるところが大きいのである。そうだからこそ、投資から投機が問題となってくる。この論の流れは、よく理解でき、ここに高英求の独自性があることが判る。

大きなケインズ研究であるが故に紹介され、

引用され、それへの批判も出てくる。いくつかの論点があるが、ハイエクの批判がもっとも比較の視野に乗せる意味があるように私は解釈する。ヒックスの批判などは、流動性資産のもつ自由な参入とそうであるが故の過剰な沸騰と来たりうる爆発の危惧という批判的展望を含んだケインズ流動性論を、最初から「許せない」と私には映る。ヒックスには、歴史的連続の中で自分のいる位置を相対化して発信しているかを問う。ミルトン・フリードマンは、動機そのものの否定に向かっている。ケインズは貨幣数量説の絶対的批判に骨身を注いだ。が、他方、フリードマンは、貨幣保有の3動機を疑問視し、取引動機や投機的動機そのものに疑問を投げかける。そして、貨幣を債権、株式、住宅、耐久消費財、他資産と同列に並べるべきだという。これでは、金融資産の持つ特殊性、それが経済全体に対して持つ重要性を否定しており、説得力に欠ける、と高英求は指摘する。確かに、一般資産の中に貨幣を埋め込んでしまおうとする論には、各資産の流動性の違いが棚上げされ、限界があると受け取れる。ケインズは、金融システムの量ではない「質」を問うていることこそ理論上の焦点なのである。

何が生産性の高い投資で何が低いのかをヒックスは問うているが、ケインズの問題意識は何が雇用を左右するかにある。この展望のなかの支え包み込む人間像の広さに普遍性の差を見る。被植民地化されたタンザニア村の民衆の、イギリスに向かつての「それは、あなたは植民地化主体の貴族階級だから仕事の心配は要らないだろう」という声が聞こえる。

ハイエク論では、人間が生きる姿勢の方向性を教えられる。投資家であれ民衆経済の心理の延長上にあるのであって、その大きな流れが膨張すれば経済の大危機に陥るという歴史上の省察からみた構造上のパースペクティブに、小から大へ、民衆生活から構造へと、ケインズの論

は至る。このケインズの視点を、ハイエクは「長期的に価格と生産を決定する力を体系的に説明すべき」テーマに向き合った経済学なのに「実務家の近視眼的哲学」に置き換えてしまった、とケインズを捉える。ハイエクは、真摯に向き合っている学識的姿勢を高英求は評価しつつ、ケインズの論点の核心とハイエクの批判点とのズレを指摘している。つまり、批判は的を射ていない。骨格描きは骨格そのものから降りてくるとわかりにくい。動機や民衆心意や日々の生活感覚、共同体や慣習からせり上がる肉付きあるストラクチャーが、その構造を説明し納得を得うる。

ケインズを高英求が支持するのは、貨幣を非現実的な形で経済分析から追いやるような主流経済学の伝統である。高英求の説得力ある主張となるのは「そもそも、貨幣制度を捨象して、生産技術や生産構造を短期・長期のメルクマールとする方法論には問題がある。貨幣が交換よりもはるかに長い歴史を持つという人類学の知見からすれば、共同体や社会の持続という点では、貨幣制度こそが実は長期的な役割を負わされていると考えた方がよい。言葉の真の意味で『長期』を問題にするのであれば、それは貨幣制度との関わりにおいて語られるべきである」。

フリードマンでは、動機そのものを否定してしまって、それに立ち入らないというのだから、投資の沸騰状況などへの危惧に展望が及ばず、まったく議論がかみ合わない。一方、ケインズとハイエクという2人の大きな経済学は、比較に耐えうる。それを高英求は鬼頭仁三郎を紹介して次のような比較を示す。鬼頭は貨幣の短期の機能自体がさしたる意味を持ちえないと論じ、長短期を問わず貨幣経済論そのものに進むか、それ以外の実物経済の道に進むしかない、と対照する。鬼頭は実物経済論に「逃げ込む」という表現さえとっている。ハイエクはスラフアとともに貨幣経済と非貨幣経済を分け

て考えており、ハイエクが「非貨幣論的」であるのは経済主体が将来について予見できるという想定をもつからであり、これに対し、ケインズの『一般理論』は将来に関する予想の不確かさの上に立つ経済の性格を捉えることを課題としている。恒常的な、焦点化して捉えられる経済主体というものを措定しうるか私も疑問を抱く。また、予想という要因が関係する経済だから、そこには当然、貨幣の特性が係わってくる。ここでの時間軸の持つ意味も重要だろう。現在一将来をつないだ連携で見るという視点は、首肯できる。

ケインズは、流動性に重きをおいた証券市場の組織化が、社会的に必要な長期投資を阻害してしまう、という危惧を抱いていた。この貨幣の流動性が制度の在り方と強く関連することを、高英求は「流動性の制度依存性」と呼ぶ。その意味で、ケインズ理論に賛意をもちつつ、高英求はもう一つの関連重要性を捉え「流動性の権力依存性」と呼んでいる。

ケインズが制度についても詳しい制度分析に入っていたか、というところでもない。ただ、自己利子率については、制度への詳細な考察が認められる。

<自己利子率>という経済学が伝統的に使ってきた訳語では、高英求は固有利子率、個別利子率と訳すべきだと主張する。確かに、それぞれその分野独自の利子率、その対象となる領域に固有にあてがわれる利子率、他とは異なるその特別な物にそれぞれ付随している個別の利子率、という意味であって、固有利子率、個別利子率がその中味を端的に捉えている。

異なる資産とそれに伴う異なる利子率が存在する、つまり、複数の資産・利子率が存在することに、ケインズは着目する。小麦利子率、住宅利子率、銅利子率のようにである。高英求が訳し直すように、個別利子率という訳語があてはまる。貨幣利子率とその他の資産の利子率は

決定的に異なる。自己利子率とは、「収益」から「持ち越し費用」を引いた後、「資産を自由に使える力」＝「潜在的な便益」（喜んで支払おうとする額＝流動性プレミアム）を足す、として定められる。まさに「全収獲」である。これを言い換えて、価値増大が期待でき、保有コストが小さく、いつでも現金化できる資産のことであり、これは「現金＋銀行預金＋一部の債券」であって、人々はなかなか雇用を生み出すような投資に踏み切れない、というケインズ説を本著は解きほぐす。これを、宮崎義一は、金利生活者 *rentier* からみた資産の分類を示していると核心を捉える。貨幣は「収益ゼロ、費用ガマンできる程度、流動性将来性絶大」という特色を持つことが高英求によって析出されている。確かに、他の資産は、鉄工所、銅、住宅利子率にしても、小麦、機械にしても、そのための持ち越し費用が極端に大きすぎることを、私たちは確認する。ここから、貨幣量を増やせばよい、という量的な処方導き出されるが、こう狭めるのではなく、高英求は、流動性プレミアムつまり安全で現金化が簡単であること、最も影響をもって関連するのは何か、が問われなければならない、と論じる。資産がもつ元来の資質だけによらないからである。より具体的には、中央銀行がどの金融資産を買い支えるか、に関わる。その時代状況、証券市場などの制度・慣習に大きくかわり変化する。しかも、それは、バーリが示唆したように、行きつくところ、制度・慣習をデザインする権力がそれを左右する。

人為的に膨らまされた流動性が、往々にして次の危機の原因になる、という今日まで不変の問題としてあり続ける。この高英求の論の有効性が大きいのは、貨幣に変わる新種の金融資産が生み出され、それが最大の自己利子率を持つような事態はいくらでも想定できる。多様なコインが実際に生み出されている。マネーのなだれ込みが危機を呼び起こすことを常に考えてお

く必要がある。期待価値の高いものにどんどん流れ膨らんでいく。ケインズ『一般理論』は、量だけを政策変数として理解してきた経済学伝統であるが、危機後の異常な金融緩和が問題を再生産するということは常に留意されなければならないことを説く。高英求の量だけに閉じない解釈と政策立案の方向性は、妥当性をもって首肯できる。投資不足と非自発的失業を生んでしまうことこそ、社会と経済が論ずべきテーマとしなくてはならない。そのために、次々に生み出される金融資産から、「貨幣の多様性・複数性」を理論土台にするという高英求による深みある概念化・枠組み化が提示されている。高英求が「非自発的」と命名する、失業の社会が責任を取るべき罪悪への視線のもつ高英求の社会愛を、私は読み取る。ここにこそ注目しなくてはならない。

こうした貨幣の奥行と深まりがあるからこそ、ディラードのような、物々交換幻想を脱して、より次元の大きな枠組みで貨幣を捉える「資本主義の制度としての貨幣」という、「社会的に組織された私有財産」として解釈できるような貨幣論の説得性に結びついていくのである。資本の成長は、カジノの賭け事の副産物になってはいけないことを私たちは読み取るのである。また、伝統的な量に関わる金利政策だけではなく、雇用へもパースペクティブが届くような形で、多様に生み出される金融資産の「独自」利子率こそ、分析の対象とならなければならない。投資は、社会のものにすること、社会化が必要なのである。その社会化を、世界へと広げる視点も求められることを、本著から読み取る。

第5章 国際資本移動と中心国の責任— ヌルクセ理論の再評価—を解き ほぐす

ケインズ『一般理論』は、流動性に注目して

論じたが、一国内に視点が収斂しがちである。ケインズの問題意識を共にしつつ、国家の枠を超えて論を考察していった経済学者として、高英求はヌルクセを取り上げる。金融危機が起ると、途上国が責められがちである。だが、実際は、多くの場合、根本的な原因は先進国の側にある。カネ余りの中心国から途上国にカネが流れてくるが、儲からないとなれば一気に引き上げられて、途上国は金融危機に陥る。この責任は、中心国にある。流動性は、一国に閉じられる問題ではない。ラグナー・ヌルクセは早くから流動性の問題を世界的なレベルで論じていた。

こうした論を進めていくとき、構造学派・従属学派が提唱した世界経済の「中心—周辺」という視座は、貿易のみならず貨幣・金融の面でも有効で重要であることが示される。

1920年から1930年にかけての両大戦間で、「中心」に格上げされ債権国となったアメリカが国際投資を急拡大させ、空前の株式ブームとその大暴落を経て、マネーの世界的な循環を途絶えさせてしまった。これが世界恐慌の決定的主因となった。「マネーは制御しなくてはならない」。とりわけ、短期的・投機的な国際資本移動は、封じ込めなければならない。これがヌルクセや高英求が共通して持つ政策的良心である。

1970年代初頭に、国際金融安定のためのタガとしての枠組み、ブレトンウッズ体制がアメリカの政治決断で放棄され、その後も、安定を志向する体制は再構築されていない。固定相場制だったのに、アメリカがこれを破壊して変動相場制を主導してきた。流動性を高める方向に変化してきた。ここでの教訓は、バーッと資本がやって来て、一挙に引いてしまうと、脆弱な国家はやられてしまう、というものだ。ヌルクセは、ケインズとともに、行き過ぎた資産流動化を強く戒めていた。先進国中心に、証券という流動性資産を拡大させ、1980年代にはこの証券化が一層、促進された。浮動的で、短期的

で、投機的な金融資産が増大し、これが国際投資と結びつくことによって、世界的な金融危機がもたらされた。責任は、ヌルクセを引いて高英求が論じるように、「中心」先進国にあることが明白である。

ここで、雇用の確保と所得格差の是正が求められるわけだが、この所得再配分を、いままで国内視点に閉じられていた是正の普遍性をより広げて、「国際的」に行うことが政策的・経済理論的に求められてきたのである。つまり、周辺の国に視点を置いて、そこでの所得向上をいかに実現するか、がヌルクセの最重要課題だったことを学ぶ。

国際資本移動は、ヌルクセ以前にはほとんど大きな主題として注目されてこなかった。しかも、大事な点は、トランスファーを問題として捉えるときは、今までの論だといつでも政府間の賠償支払いやこれに準ずる流れが問題にされ、自発的な貨幣トランスファーや資本移動が取り扱われることはなかった、と高英求は学説史を整理して評価する。ヌルクセがこれを拓いた。資本移動と交易条件といった実務的な表面的経済分析ではなく、より本質的な「中心国と周辺国」間の主権があるのにそれが施行できるか否かの、不平等な構造的な問題として、ヌルクセは資本移動を課題化した。

ヌルクセ論として、例えば、資本移動の原因を需要変動と利子率格差に求める、または資本移動と生産構造との関係を重視するなど、特色ある分析がある。が。ヌルクセでは、なによりも、国際資本移動で先進国（中心国）の責任を問うている点が意義深い。先進国における証券ブームの「チープマネー」政策など投機の横行を助長することこそ、戒められなければならない、とする。ヌルクセは資本移動と生産構造との関連にも注目していた経済学者だが、国際通貨システム崩壊の原因は、マネーが生産から「臆病に遠ざかり」、収益の採算ではなく損益への

恐怖によって突発的に動いてしまう、というヌルクセの分析指摘を、高英求は抽出している。

そのために、為替相場の安定化と資本管理が求められる。ヌルクセは、国際連盟の報告書を執筆しているわけだが、ここにも中心国の責任は明確に記されている。不安定化の要因としては、自由変動相場制を批判している。この自由度が増すほど、統制困難から破壊的な資本移動が起こってしまう、という至極妥当な危機感を、高英求も私も共有する。また、ブレトンウッド体制への信頼・承認があったにしても、緊縛された固定というわけではない。ケインズが「伸縮的な交換レート」という幅を認めていることへの是認的な注視が認められる。放任主義に任せきる、ということへの危惧なのである。「自己悪化的性格をもつ大量の一方的移動」への警戒である。それでも、全体として、ヌルクセが危惧したのは、「変動論者が強調した国際安定と国内安定という2分法」は成立しない、という点である。ヌルクセは、重ねて、投機的移転と資本逃避を統制すべきと主張する。人類学の世界では、関根康正が、この短期流動性資本が自由に暴れまくるネオリベリズムの様相に対して、その先に、資本主義につながって成功したコミュニティではなく、世界の周辺で、「敗北したローカリティ」の「救出」こそが人類学が扱うべきテーマだと論じている⁽¹⁾。資本が届かない「老」でも尊敬される、アフリカ・フィールドワークのエイジングの固有文脈を、後に考える。

マネーの流れをより長期的で安定的なものに換えねばならない、とケインズ、ヌルクセの論に、高英求も同意を示して、ヌルクセの安定化提言を5つ析出している。それは①金の不使用、②主要国間の相互協定で為替相場決定、③主要通貨相場の安定、④民間流動資金の移動を抑制する国際協力があって、次の⑤番目と相互に関係合っている。とくに⑤番目は、南北を繋ぎ、

中心一周辺をまたぐ意義を持つ。それは⑤途上国に安定市場を保証するための、主要国の財政・銀行政策のある程度的一致、である。この5番目の提言内容に、高英求が取り上げている、ヌルクセの、途上国への市場提供という視点、したがってそれは高英求の周辺へ行きわたる視点の広さなのであり、そこにある確かなパースペクティブを読み取る。また、その分、世界恐慌の原因・責任は中心国の資本輸出にある、という歴史的な再確認と中心国の責任所在の認識である。

「開発」ターミノロジー

—開発は develop か exploit か、の問題意識

この延長線状に、展開した論の先に、開発経済学とのリンクが見えてくる。私個人は、アフリカ人類学の実践者として、「開発」というタームは、公の論では使うことが今までなかった。私の前任校、名古屋大学の国際「開発」研究科は、GSID つまり Graduate School of International Development と、日本語⇔Englishの相互訳関係になっているのだが、developmentなら「発展」と訳したほうが合致度が高い。内発性であり、自動詞、自主性、indigenousな主体発揮性を読み取る。他方、「開発」を使用するなら、誰が誰を「開発」するのか、常に問われる。他動詞で、和英辞書を「開発」で引くと exploit が対応単語として出てくる。そして、この exploit を英和辞典で引くと、「搾取」するが出てくる。こうした理由から、私は多くの場合 develop を想定して、日本語でも自動詞としての内発主体性を評価する場面が多く、「発展」を使うことが多かった。今もそうである。

この、誰が誰を「開発」するか問う姿勢の有無、ここが意識されているかどうか、がポイントである。内に閉じた存在は今の時代ほとんどなく、あらゆる存在は関係で成り立つ。流動性において、その内外国際性を重視し問題を可視

化したのが、ヌルクセや高英求の経済史における業績である。その内外関係において「外」から、正をも負をももたらしうからである。正なら、周辺その地の発展 develop を促すし、負なら、中心が搾取 exploit する。だから、開発経済学という分野が存在することは、あり得る。それは立つし、またヌルクセのようなパースペクティブとその背後には「周辺にも資本形成と雇用を」の問題意識・哲学が横たわっており、この内外関係は是の関係である。ヌルクセは、国内的のみならず国際的にも、格差の是正を訴えた。「中所得の経済を創出する方法を再び見出すのが開発経済学の進むべき道である」と述べる、と高英求は抜きだしている。

他方、「是非」でいう悪をもたらす非の関係もある。意識されないで北側が無邪気にも行う行為が、個的な私利行為が総じて社会暴力となることへの洞察を欠くときがそうであり、南側社会に損害や迷惑をかける場合や尊厳の無視となっている場合がかなりある。流動資産が自分の利益と欲求充足と拡大を求めて、周辺に大挙闖入し、また何の前触れもなくその周辺国のもつ環境・現代歴史状況に関係なく、無脈絡に他所へと私利を求めて大挙退却がなされるなら、他所への資本移動はとかくその国の求めるタイミングとは無関係になされ、このように判っているのに意識されてなされるなら、それは植民地化そのものの行為であり、当初から非難に値する対象行為である。ヌルクセやケインズや高英求が思考する、流動性の行き過ぎた自由乱入は中心自身にも悪影響をもたらす、周辺に乱入すれば破壊的な被害を与え得る。まさにこれは植民地行為だ、という批判がヌルクセ・高英求・ケインズによって起こっているわけであり、その意識化と政策立案は、現代経済学の主流は受け取って理論化せねばならない。本書の意義は大きい。

私は、今まで論文でもセミナー口頭発言でも、

可能な限り「開発」タームを避けて、自動詞主体的な「発展」に置き換えられるような主語・主体変換をおこなって、実質的に北からの暴力をこうむる南北関係を相対化して、出来る限り南からの視点・生活地平に寄り添って公表してきた。そこにある私のアフリカ人類学の意志と、ヌルクセが日本語でいう開発経済学・開発論を拓いて、世界的な権力構造を構造主義ともつながつて告発してきた問題意識とは、通底するものがある。ヌルクセと高英求が言う、南北も「中心一周辺」も交錯し合う「同時代人としての経済と社会の安定に対する人々の要求の高まり」の積極的肯定に私も参列する。

私が、アフリカで起こっている同じ南北交流事態でも、まず exploit につながる「開発」の用語を控え転換して、アフリカ主語の「発展」に主体転換できるような事態説明の論じ方をする、「開発」用語抜き説明の問題意識と、ヌルクセが論じ高英求が抽出してきたような「周辺にとって望ましい『世界経済の型』はまだ実現されていない」つまり「先進工業国による国際投資で回収経路が創り出される中で、『経済の型』が決まっていくという分析とは、「中心」のイニシアティブと「周辺」の希望との齟齬を同じく物語っている。そのズレは暴力でもある。それを可視化しテーマ化することが、着実に高英求によってなされている。

ヌルクセは、黒字国としてのアメリカの責任を問うた。新しい型の投資を求めた。アメリカ自身も19世紀に資本輸入を通じて成長を達成した。ここで、かつてのイギリス型とは異なる新しい型を求める。19世紀型のイギリスがおこなった投資の半分以上が、カナダ、アメリカ、オーストラリア、アルゼンチンなど、イギリス諸島や欧州からの訓練された企業心を持つ人々を含む6000万人もの大移民を引き連れた同じ文化地に対して行われていた。つまり、白人が主体となった「同じ文化圏」の国々に対する投

資であって、同じ経済の型を同じ経済の地に、しかも同程度の経済レベルの地にはめたところがあった。こうしたものではない外部性ある、したがって周辺に届き異文化をまたぐような普遍性を内包する「新しい型」の投資の必要性を本著は説くのである。

国際的な所得再配分は、世界的な所得格差の拡大化から、求められている。これに連動する国際的な動きもある。アフリカ・ガーナ出身の国連事務総長コフィ・アナンが国連憲章の目的推進を強く訴え、所得再配分のための公的な枠組み創設を提案した。ヌルクセや高英求の説く普遍的な精神は、常に想起され経済政策として、実現への道筋が模索されるだろう。

第6章 周辺と異質性へのまなざし—杉本栄一の短期流動性原則論を解きほぐす

流動性を軸に世界経済を構造的に分析する数少ない研究者に、日本では杉本栄一がいる。『統制経済の原理』（1943年）を著した杉本は、ケインズの『一般理論』から示唆を得て、「短期流動性原則」という独自の概念を生み出した。これは、いつでも財産を現金化できるという特質を表わしており、これが全体としての「制度のリズム」を作る。

高英求は、次のような点で、杉本の分析・考察を高く評価している。まず、先進性を誇っていた英米中心経済の核心に、流動性があるという指摘である。杉本は、イギリスによる「周辺」植民地や半植民地へのリスクの転嫁があったことを、批判をもって見抜いていた。また「異質的経済構造」という概念を提唱し、日本経済やアジア経済の課題に注目した。そして、「制度のリズム」というのは、個々の行動があるように見えても、全体構造としての基調が出てくるというものである。「短期流動性原則」は、い

つでも財産を現金化できるから、これが制度のリズムとなり、したがって、これに何らかの規制がかかる、という杉本の論理組み立てがある。高英求の杉本評価の根底には、杉本の「短期投資は反社会的」とまで言い切る強い批判精神と、杉本栄一・高英求が共鳴する平等に向ける平準がある。より経済実践に引き付けて言えば、短期的な金融に馴じまない分野をいかに守り育てるか、という問題意識を、杉本栄一・高英求は共有している。

杉本栄一がケインズを高く評価して、それを発展させているポイントを、高英求は析出する。杉本の主張は、制度の短期的リズムがこれほどまでに続いてよいのか、という問題指摘にあり、これは、ケインズ『一般理論』第12章「長期期待の状態」から着想を得ている。杉本は「社会全体にとっては、投資の流動化するものは存在しない」と繰り返し指摘し、流動性の過度の追求の「反社会性」を糾弾する。ミクロ・レベルよりも制度に焦点をあてる。

ケインズから示唆を得ていた杉本であり、したがって共通の主張も多いのだが、杉本独自の理論化や焦点化もあることも本著から学ぶ。金との兌換制度との連関で流動性を説くことは、独自である。経済制度全体としての統制機能に力点を置いている。

リスク転嫁と長期投資について、高英求の杉本論への共鳴は力を増す。「短期流動性原則が、個別経済に妥当する国民経済の価値測定にともなう危険を、他の個別経済に転嫁するという原則である」という分析を引き出す。日本の戦時体制の課題を明らかにして、ケインズが論点とした「投機の抑制」以上に「生産力の向上」を求めた点を、杉本のケインズとの相違として抽出する。「国民経済」や「国民生産力」に杉本が焦点を当てていた、という高英求の説明は腑に落ちる。流動性を単に危険視したのではなく、相対的に正負の両義性を焦点化していた、とい

える。日本というイギリスとは異なる個別経済制度の場で、どう修正すべきか、修正が要る。軽工業から重工業への転換が求められていた戦時体制で、短期流動性原則を若干、長期化する修正が日本の個別経済には必要となる、という道筋が説明される。日本の戦後の復興必死の時代形相は、カジノ化を恐れるまでには至っていなかったことを、読み取れる。

「制度のリズム」論を、杉本のオリジナルなアプローチとして、高英求は取り上げる。この「制度のリズム」とは、自らの「個別経済に対して許容する経済活動のリズム」のことである。経済の個々の主体が自律的な動きをしているつもりでも、経済全体を縛る大きなリズムがそこに作用している、という解説を得る。ミクロ行動は、マクロ構造に制約を受ける、ということである。つまり「制度的統制」がここにはある。流動性が短期的なリズムから逃れられない、という点が杉本論で強調されていることを引く。国家よりも緩やかな「制度」の統制のほうが強力かつ広範囲に及ぶ、と杉本論は捉える。この含意が、分かり易く導かれる。現代の企業経営の短期主義は、経済や社会全体に甚大な影響を与えている、という現代テーマとの合致を高英求は対照化して示すのである。

金本位制こそ大きな統制経済という、今日までの経済学通説と受け取れるものを突破する意図をもった杉本論の独自性が解説される。高島佐一郎の「英国中心の金本位制」が「英国的制覇のもとに運営された通貨管理政策」に他ならないという論を紹介して、これ以前の金本位制との連関を指摘する意味あるところを解く。制度のリズムに加えて、金本位制が最も安全な制度である点だと考えられていることに、注意が促される。短期的なリズムが制度化されている経済趨勢のなかで、システムの不安定さをいかに抑えるのか、という現代に通じる問題追及がなされていることの意義を、高英求は指摘す

る。

イギリスが覇権国から滑り落ちていく過程で、そのリスクが基盤の整備されていない周辺他国に転嫁されていったことの問題点こそ、重要な説くべきテーマと、高英求は考え、その論点指摘は十分な説得力を持つ。杉本がポンド凋落やその広がりやのなさを分析している点が、取り上げられる。つまり、ポンドの使用を強制される周辺にとって、ポンドの流動性が確保されても、ポンドを自由に他国通貨や金に転換できないなら、真の意味の国際的な流動性が確保されているとはいえない。ポンドの地位低下が周辺国の犠牲で贖われる。イギリス・イスタブリッシュメントにとっては、ケインズさえも、この論点の桎梏の中にいた、という本著の説明は、高英求のもつ、物事の正負の「評価と批判」を客観的にみていく不偏の「正義の姿勢」を読み取る。

イギリスが、一方で軍事力の威嚇、他方で借款によって、バルカン、スカンジナビア、東アジアの小国を「ポンド・ブロックの培養圏」たらしめようとした、という杉本の史的政経分析に、高英求も私も首肯する。ポンド・ブロックというブロック経済の形成によって、競争力の弱いイギリスの工業製品が守られ、販路が確保された。ここまで杉本は、分析の眼をイギリス不正義の矛盾に向けられるのだから、その先へと展開を、日本への適応分析においても普遍化することが望まれるのだが、そうは直結的には整合しない。

その英米流の経済統制では、国内的には長期を短期的にすることによって短期的に等質的な経済「行動」を造り出し、対外的には短期を長期化することによって長期的に等質的な経済「構造」を造り出すことが目標となっていることを、杉本は捉えている、と抽出される。ただ、杉本は、「周辺」「植民地・半植民地」という用語も使用し、そこへのリスク転嫁を批判的に捉

えていたことは評価すべきだが、ここでの内外は英米そして日本の内奥と対外的の区別であり、内と外とを切り分けているだけで、その恣意性は問題だと高英求が指摘している点は、首肯を促される。この点が、同じ論調にありながらも、杉本栄一・高英求両論の違いを明らかにするものである。つまり、高英求のように「宗主国と植民地との間の支配—従属関係」を洞察で掘り込めるかということが、ポイントとなる。高英求論のほうが発展の視野が歴史的な植民地支配につながる「中心—周辺」論へとひろがっており、その問題点の捉え方が根源的でより深い。世界経済の問題として、問題の根底への視線がある。この違いは、杉本が、日本の重工業と農業の国内経済振興を目的とし、大東亜共栄圏を理想的に論じていたことに起因することも教えられる。

こうして、杉本論の経済理論としての特色が、整理される。経済統制のあり方が、英米では短期を国内に長期を国外にと切り分けられていたわけだが、この英米的統制の形ではなく、日本においては、国民経済の構造が金や外貨に対して長期化するだけでなく、円貨を基準にしても個別重点的に長期化され、長期のリズムと短期のリズムがもつれ合いながら並存し、全体としての国民経済の制度的リズムが異質複合的に長期化される、という杉本栄一の1943年の著の序文が引かれている。リスクを対外的に転嫁する英米と、それを内部化したいと理論化する日本との対比である。内部で短期に営利原則を活かし、国民経済の周辺で流動性原則の長期化をおこなう日本、というように杉本は希望観測的に規定し提案する。この時節の大東亜共栄圏の、日本にとって有利な国際分業体制を構築しようという案に対して、杉本が、世界市場をアジアに狭め英米の代わりに日本を置くというその安直さに批判を行うことが説明される。

この考え方の基底をなす、杉本の「異質的経

済構造的統制経済」とはいかなるものか、という検証・評価へと、高英求論は進む。「本来長期的であるはずの投資を、商業銀行や証券取引所の制度によって可能な限り短期化することがイギリス流の経済統制である」。これを杉本は「等質的経済構造」と呼ぶ。これに対して、日本では、重工業は戦争の遂行には未熟で、農業の機械化は遅れていた。重化学工業と農業という質の異なった2個の産業を同時に育成・維持しなくてはならない、という「異質的経済構造」と杉本が呼ぶ課題を日本は抱えていた。この産業構造の相違の時代分析とターミノロジーは妥当性があると捉えて良いだろう。だが、その異質構造への対処理論化には甘さがあった、と高英求は批判する。杉本論には「流動性原則を適当に長期化する」などと漠然性がある。だが、より具体的な経済政策として、短期金融の組織と並列的に長期金融を組織化すること、そして、それを日本銀行が統括する全国金融統制会がコントロールすることが、杉本によって提唱された。また、杉本は短期流動性を助長促進する取引所制度の整備も同時に見据えており、この長短を複眼的に包んだ戦前・戦中の改革による金融構造が、後々の戦後の高度経済成長につながった、と高英求は評価するのである。

ここに、「ナショナルな枠組み」「周辺へのリスク転嫁」という世界経済的な視点、さらに異質的経済構造を支えるための金融制度の構築という視点は、今日においても革新的な課題であり続けている」と、ケインズ『一般理論』で欠落していた論への切込みと独自の論展開に高い評価を与えるのである。戦時体制加担を恐れて、杉本自身は、戦後も戦争遂行に関する決まり文句が埋め込まれた著書『統制経済の原理』のこの論点を再検討しようとしていない。

ここから、国民的生産力の増強など「ナショナルな枠組み」や「帝国」の検討、つまり、植民地や支配地との関係を明示的に語り論じてい

くことが次なる課題や展望となっていくことを、高英求は忘れていない。短期的な制度のリズムによって押しつぶされない経済・社会構造の構築を求め続けていくことの重要性を、高英求論によって私や読者は再認識するのである。

第7章 動産の世界的な争奪—モンテスキューとケインズ を解きほぐす

本著の終章を紹介し論評する。流動性資産の問題を、世界で最も早く問題にしたのは、フランスの思想家モンテスキューであった。高英求は、このモンテスキューへの必要な注目が今日までなされてこなかったことを指摘し、モンテスキューの『法の精神』に論述されている説に賛同する。Say からの脱却 break-away を経済学は良く論じてきたが、その「対」をなすモンテスキューへの回帰 return への注目は、経済史、思想史のなかで実践されてきていない。ここに高英求の独自性がある。

高英求は、ケインズがモンテスキューに注目した一節を、つぎの部分だとして抽出する。それは、モンテスキューが、高利が商業を阻害してしまうこと、そして貨幣に代価 (price) すなわち利子がつかなければ貸出は行われなくなる、ということを論じている論述部分である。そして、資産を持つ者もまた、一面的ではない。富裕層さえ、消費と投資の二者択一のなかで行動する合理的な経済人ではなく、資産を持ちながらも不安を抱え、流動性ある資産を保有したいという心理をもつと、ケインズが捉えていたことを指摘する。ここに、ケインズのもつ、そしてこの一節を取り上げている高英求のもつ、富裕層に留まらない一般民衆にも及んでいく人間洞察を認める。

この点は、ケインズとモンテスキューの共通項である。

他方、モンテスキューがケインズより注目を

凝集させていたのは、動産をめぐる世界的な争いであることを本著は示す。「諸国民の貪欲は全世界の動産を奪い合う」。この世界への動産の流動性こそ、高英求が注目し、本著でこれまでの経済学とは違って問題とし注目して論じたポイントである。ここに生まれ出る世界を分ける階層差と不整合にこそ、社会政策の平等化意志が公的に発動されなくてはならない、という高英求の高い社会理念が読み取れる。

まず、商業自体のもつ正の機能は、深く留意されなければならない。高英求は、モンテスキューが、商業がもつ平等性や穏やかな平和への道筋を論じている点を、高く評価する。高英求は、モンテスキュー『法の精神』とケインズの『一般理論』とに通底するものがある、と説く。モンテスキューが、ケインズも重要視した証券や、土地と動産に注目していたことを捉え、人と富が国を超えて移動していく歴史的な動態を捉えて、暴虐や圧政から逃れた人たちが、ヴェネツィアやオランダなどで商業を発展させた、と解き明かし、商業のもつ平和達成や経済繁栄の機能を指摘する。

さらに、モンテスキューの商業の強い肯定を抽出する。「商業は破壊的な偏見を癒す」「商業が存在するところではどこでも、穏やかな習俗が存在する」「商業の自然な効果は平和へとむかわせることである」「商業の精神は人間の中に厳密な正義についてのある感情を生み出す」と、高英求はモンテスキューに共鳴して主張する。このモンテスキューの言葉とそれを取り上げている高英求の、経済行為のそのものを超えて、経済も人間との生き方とのつながりの中で考察されなくてはならない、という経済・商業の奥底にながれる人間への思惟に打たれる。今日の日本でも、商業・経済・商品・交易の見本市が幕張や名古屋港で行われ、その交易「場所」を「幕張メッセ」「名古屋港メッセ」と呼ぶが、もとよりメッセは祈りの「ミサ」と同義であり、

経済は信仰・宗教や生き方の倫理と結びついて
いることを再確認する。生き方を問わない経済
史は、経済学の時流の「本流」と結びつき得て
も、経済史の「本質」を突いていない、という
高英求の本著の主張を是をもって確認する。

高英求は、ケインズの『一般理論』とモンテ
スキューの貨幣論を比較して論じ、動産（流動
性の資産）のもつ可能性と危険性の両方をモン
テスキューは押さえていたこと、を指摘する。
つまり、国際金融における力の格差を問う姿勢
こそ重要であり、国際金融の最先進国イギリス
の経済官僚ケインズには、この危惧論が欠けて
いた、という思想史的慧眼を高英求は保持する。
人類学の世界では、上で触れたように、関根康
正が、イギリスの植民地化を受けたインド都市
のメインストリート裏にある路地という「周
辺」の「周辺」、つまりグローバリズムとその
資本的体现であるネオリベラリズムとつなげて
成功したコミュニティではなく、その資本論理
から置いてきぼりを食らい続けてきた「敗北し
たローカリティ」の「救出」こそ、人類学が目
指す社会的コミットメントの責務だと論じてい
る⁽²⁾。

この点、むしろハーシュマン Albert Hirschman
こそ、モンテスキューの動産論に注目していた
経済学者であると引きあいに出し、「人間の情
念が邪悪たれと人間の考えを突き動かしている
にもかかわらず、邪悪たらざるほうが人間の利
益にかなっているという状況は、人間にとって
幸福なことである」とハーシュマンの言葉を引
く。ハーシュマンが、モンテスキューを高く評
価して、「為替手形と外国手形の売買を権力へ
の防波堤として歓迎する」ことに同調を示して
論じている。こう高英求は、ハーシュマンがモ
ンテスキューの商業貿易の平和創造機能を論じ
ている点を歓迎しつつ、モンテスキューが主
張した国際投資の持つ激烈な格差を生む負の機
能については注視が届いていないことを指摘す

る。こうしてモンテスキューへの全体論への注
視を再度、促すのである。

こうして、高英求は、モンテスキューに共鳴
しつつ「圧政や暴力から逃れる道筋をもたない
世界はおそろしい」と論じ、現代の世界の経済
状況を捉え、現代の経済学に過度の資産流動化
に対する理論的な問題意識が希薄であることを
批判して「危うさをはらんだシステムが制度的
にも思想的にも歯止めを欠いた状態にあること
こそ問題にされなければならない」と論じるの
である。貨幣はシンプルな交換手段ではない。
多様性をもって社会全体を不安定化してしま
いかねない富としての貨幣への注目に、高英求
の書は私たちを導く。ヌルクセや杉本栄一の研
究から不平等で不公正な「中心一周辺の構造」
の理論潮流を受け継いでさらに深めつつ、ナシ
ョナルな枠組みを超えて世界経済の構造を捉え
る視座をもった貨幣経済論を育てていく、と課
題をともなった展望を高英求は見据えるので
ある。

こうして、高英求は、次のように説く。資産
が流動性の形をもって、国家の枠を超えて移動
し、その移動財・手段を軸にした個人の利益の
獲得と増強に資すると同時に、それが、その国
やその地の産業育成やそれに伴う雇用に使われ
るなら、正の機能としてはたらく。移動してき
た外的個人だけが儲けて負の遺産や課題だけ残
して問題処理をその地にまかせて去るなら、こ
れは移動財・手段の負の機能である。個人の利
追求から見れば、どこにでも素早く可動的な選
択が効く短期流動性を確保したい。機を見るに
敏な機敏狡猾である。中心間の水平移動の貿易
や流動性資産の移動は頻繁だが、国際のなか
にある階層差間の上下移動はこの移動の安全と
利益を保証するその地の体制や外国の体制が未
整備でその基礎作りさえ整っていないことが多
いことから、その地の産業育成はそう簡単なこ
とではない。だが、それに向かう方向性をもって

いる制度や施策であるか、その意志が重要であると高英求は根底で発している。これは、どの枠の普遍性で人びとの福利厚生と幸福を準備するのか、という政策の「意志」の問題である。累進課税など、意志がなければ実現しない。利益が及ぶ範囲を国内にとどめるのか、外国をも包む制限ない国際なのか、その中間のブロック経済のような中範囲システムのなかの普遍性なのか、が問われる。SDGsも、単に環境整備の為のマナーを持たない周辺や南側社会への要求という形だけでは説得力がない。中心の身を削る意志が、周辺に呼応するような関係を築かねばならない、それを制度化しなくてはならない、と存在を培った高英求論を学んだのである。

第8章 財なき者が養う文化体力一量ではない、意味を問うフィールドワークの認識論

高英求理論から学んだことを、自分のアフリカ人類学に照らしてそこに活かし、フィールドワーク論、そこでの認識論について、ここで考察を複合化させる。意味の修得は、社会関係によって成り立っているその異文化社会アフリカから教えられる。しかも、「周辺」から「中心」が教えてもらうところに、物量的絶対量や資本量を相対化する意味論がここにある。このことから、私がここアフリカに来ていること自体が、中心からの周辺への作用行為だと再認識する。その認識をもちつつ、構造化を個々の生活場面から問い直す相対化の作業である。

8-1 定年とは何か一数える体力と数えない体力

「定年」とは何か。日本では、かつて60才を定年とする会社や官公庁が多かった。物理的に肉体労働に耐えうる絶対年数ということからすれば。その歳がそれなりの「無理をしては

いけない」労働自粛期、あるいは終結期として認められてきたとしても、さほど不思議ではない。また、日本に根付いた伝統の暦からすれば、60歳の還暦とは、木火土金水の五行と、子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥の十二支との組み合わせによる60の循環で、世界や宇宙が始原からスタートし、資源に戻るとする宇宙観である。、かつての寿命からすれば、この年齢で長寿の達成や一生のまっとうを認めて、祝福のけじめとする考え方は、妥当性と合理性があった。この身体的、物理体力が栄養状況や疾病改善状況から徐々に増強され、定年が伸びてきたわけで、これが65歳にまで労働可能性を延長している組織も多くなった。

だが、今日、産業構造も変わった。寿命も延びた。肉体労働に集約される工鉱業や第1次産業・第2次産業から、流通やサービス、デスクに座ったままの事務仕事、さらには座りも座りっ放しの頭だけ使う仕事が占める割合が増える場所も多くなってきた。しかも、そのほうが「進んでいる」などといった観念が、どこかで共有されている節がある。定年や引退、隠居といった考え方は、このように、時代とともに変わるし、また場所や空間、民族によっても変わる。

そこで、今、「本当に体力がある」というのはどういうことなのか、を問うてみよう。私が慶応大学の大学院生だったとき、カメルーン調査に東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の調査隊のメンバーとして、アフリカへ連れていってもらった。隊長は同研究所の富川盛道教授、副隊長は日野舜也助教授である。カメルーンに着いてからは、日野舜也助教授と、カメルーン北部の街ンガウンデレ近辺の文化・社会状況を、日野副隊長とフィールドワークして回った。私のみならず、日野副隊長にとっても、初めての土地である。

人類学の調査というのは、散歩する、うろつく、徘徊する、語り掛け語り掛けられる、の連

続である。雑談する、そして時に発見する。要するに、歩きまわるのである。このとき、「喉が渴きましたね」「何か飲み物を買いませんか」「そろそろ昼メシにしましょう」「ちょっとここで休みましょうか」などと提案しているのは、振り返れば、すべて私であった。このお腹のでかかった40歳代後半の副隊長は、ウェイトリフティングで鍛えてきたのか、とてもそうとは思えない。

今度は、南部カメルーンの首都ヤウンデ近くのオバラという小さな村を、富川隊長と一緒に予備調査をして回った。人類学の調査は、いつでも歩き回る。フィールドワークである。この土地も、私は、もちろん、富川隊長にとっても、初めての土地だった。「先生、喉を潤しましょう」「ちょっと早いですが、夕飯にしましょうか」と、思い起こせば、私のほうが先に音をあげていた。しおれた筋肉の足の、60歳の老齡教授は、いまでもラグビーで鍛えておられるのか、いや違う。

私が、60歳そして70歳となり、20代の若い大学院生たちを何人も指導してカメルーンやアフリカ調査に連れていく隊長年齢になった。私の足がしおれる筋肉になった。この時、どうだろう、最初に「へちやばる」のは、そして、熱を出したりマラリアっぽく消耗したりするのは、疲れからカゼを引いたりするのは、きまって、私ではなく、若い大学院生なのである。

ポスト・コロニアル状況—フランス青年の心に宿る意識されない歴史

富川隊長とオバラからヤウンデの中級宿インペリアル・ホテルに帰った。私たちの学術予算では、もとより文科省が出す研究費は限られていたし、持ち出しが多かった。最初の時などは、カメルーンに到着せよ、調査費補助は出す、という「研究協力者」の枠組みで加わった。したがって、富川隊長でも、あまりに首都ヤウンデ

滞在が長いと、宿泊費を節約する。研究協力の枠組み作りがヤウンデ大学やカメルーンの研究機構とで、ミーティングもあるためにあまりにみすばらしいホテルには泊まらない。そんなわけで、長くならもつと安価な宿に泊まるのだが、安全確保やお湯が本当にでるか、カメルーン研究代表とのカフェ懇談などを考慮すれば、インペリアル・ホテルは、ぎりぎり可能なレベルだった。そんな宿で夕食を食べる時もある。食費も宿の宿泊費と関連するので、よく外の安メシ屋に食べに出る。疲れた時などたまに、ホテルで夕食をとった。

そうした「中の中」レベルの宿だったので、節約ヨーロッパ人も見かける。食堂の隣のテーブルでフランス人やベルギー人やスイス人などのフランス語が聞こえてくる。ギャルソンが注文を取り、隣の若い青年がパリから来たことがその会話から聞こえる。フランス式でも私は普通、主食だけに節約するが、だれもが飲み物は別に注文する。ボーイが隣のフランス人青年に“Comme boisson?”「飲み物は何になさいますか?」と問うた。するとフランス青年は、何か呟いた。私は自分をそれなりにフランス語が判ると思っていたが、なんという単語か聞き取れない。知らない単語をつぶやいている。訳すところだ。「Un Quart だよ」「わからないのかい?」すぐに居丈高に「Un Quart、エビアンや Vittel の水のことだよ」と大声で説明した。「パリでは、水4分の1リットル瓶のことを Un Quart というんだよ!」。「(こんなこともしらないのか、辺境者が、田舎者が!)」という心で叫んでいる北側からのわめきが隠喩として聞こえてきた。Un Quart とは英語で言う Quarter、それは4分の1であることに間違いはない。4分の1が「水」を指し示すことの絶対的理解を、カメルーンのヤウンデで平然と「後進者」にパリ「先達者」が求め諭せるという心理とそれを裏付ける政治経済構造は、南北関係の継続、中心と周

辺の関係であり、植民地化は独立後も心意とアイデンティティにおいてその認識上れっきとした継続性を示し存在している。ポストコロニアルの実態を、食堂テーブル越しに私たちは実感をもって確認した。

それは、通関の時もそうだ。遠く異国アジアの日本から来た私などは、何をチェックされるか、理不尽な要求などされないか、心の中で緊張している。だが、フランス人は。ビジネス風でも観光の家族ずれでも、仲間と連れだったバカンス風でも、「やれるものならやっごらん」とタカをくくった横暴な態度、威張った口いいである。フランス語も「聞き取れるかい？」と擲楯と見下しを含んでいる。

このフランス青年の植民地言動は、挙手空拳でこの地からシンドクとも学びを重ねるフィールドワークの精神とは、逆のものである。こうして、力のない若造が暴力によって築かれた構造的上下関係に頼った借り物で、歴史的な自己検証を怠る。一人一人の質だが、この質は、構造的な量全体に通じる。量を図らなくとも、量のミニアチュアは構造的印画となつて、質の中に滲み込んでいる。個の質が救済されるような、掬いあげられるような枠組み設置が必要なのである。

こうあつてはならない、きっと私にも、こうした、次元を変えればいくらでも自分の愚かさが見える権力関係を行使してしまっている場面があつた/あるに違いない。若造としてのエゴセントリックな回りが見えない狭さはどの文化にもあるし、それだけなら純粋で照り返しの時期が必ず来る。フィールドワークの交渉や関係のなかで是正を促される。痛い目に合う。だが、これに歴史的な政治経済構造の不平等性、上下性が重なると、その暴力は正当であるかのような錯覚を促して、加速される。

表裏のポストコロニアル状況—ナイジェリア・イケジャ空港

カメルーン調査を始めたころは、調査費や研究費もない大学院生だった。節約して安い便を探し、これを繋いで日本からカメルーンに到着する。大学院生や無給研究員は、今でもそうだろう。少しでも安い便を探して、ヨーロッパまで行き、そこからステューデント・フライト学生航空便の制度を使う。学割である。ストックホルムからナイジェリア・ラゴスに出ているスウェーデンのスカンジナビア航空 SAS の学生便を見つけた。これで、ドイツのデュッセルドルフまで行き、ここからカメルーンの隣の国ナイジェリア・ラゴスまでたどり着く。ここでコートディヴォワールの Air Afrique 便に乗り継いで、ラゴスからカメルーンの経済首都ドアラに到着するのである。

初めてのフィールドワークの空路である。西アフリカで初めて大陸の地を踏んだのは、ナイジェリアだった。ラゴスのイケジャ空港に降り立った。20キロの荷物に25キロぐらいまで許してもらえんという噂を元に、23.5キロまで抑え、何とか通過してきた。機内持ち込み荷物も隣のスウェーデン人やナイジェリア人が眉を顰めるほどたくさん持ち込んでいた。荷物を受け取り、重さいっぱい荷物を引きずるように、入国審査に並んだ。ここで、仰天した。

コーナーから垣間見えた光景は、入国審査官が大きな声で、「ヨーロッパ人」を見下ろしている。入国上の不備をあげつらっている。イギリス人のようだ。首の後ろが真っ赤である。ここぞとばかり書き直しや、提出し直しを求められている。入国審査官の振る舞いは、逆襲と呼ぶにふさわしい。歴史的怨念から来る復讐劇を悟った。次のスウェーデン人も「やられ」ている。一人一人に、旅行者からみたら「イチャモン」をつけていくのだから、時間がかかる。間違いなくこれは「気を晴らす」行為だと受け取った。

私も審査のごく傍まで近づいた。そこで私の驚愕は極大化する。コーナーで良く見えなかった入国審査官の位置が、1階と2階の間のような高さなのだ。いわば1階地平を上にあげた1.2階、1.3階のような高さから審査の声は降りてくる。被植民地国の情念が、この絶対的高低・上下の格差の逆転として表現されている。「よくぞ長い間やってくれたな」という審査官に託したナイジェリア独立国家と国民の声が聞こえる。私の番になった。審査官の押印する審査テーブル地平は、私が背伸びし、腕を上げたさらにその10センチほど上にある。ここへパスポートを差し「上げる」。そこへ上からの手が伸びてパスポートを取る。そこから「君は中国人ではないんだな」と審査官の声が降って来た。日本パスポートを珍しがっているようだ。1970年代、この頃、ナイジェリアに日本のオートバイ産業が上陸し始め、ノックダウン工場ができたところである。だが、驚いたことに、私には意外なほど「いやがらせ」なく、困った質問もなく、乾いた口調の応答に終始した。北側先進国に参入したい日本であっても、アジアでの日本の歴史的暴力など、この審査官の祖父・父母を通した肌と言葉で伝わっている由もない。「アジアの若者など、まあ貧乏学生など、いいわ」という声が聞こえて来そうなやり取りだった。フランスや欧米から日本は目の敵にされ始めたが、アフリカからは乾いた対象でしかなかった。

質的場面に凝縮される量的構造—「アフリカ・ヨーロッパ・日本」の三角測量

インペリアル・ホテルの食堂だけではなくカフェ・テラスでも、中心と周辺フィールドワークは続く。昼にテラスで疲れ切った身体でカフェを飲んで休んでいると、許諾を問うことなく、ヨーロッパ人と顔立ちから東南アジア人とが、私のカフェテーブルに座り込んだ。「日本

人なのか」と。そして、延々とトヨタの車がいかにダメかという演説を垂れるのだった。国際協力プログラムで来ているフランス人技師とその弟分のカンボジア人技師だった。この頃、カメルーンでは、車に関する限り、圧倒的な市場独占を図ったきたプジョー、ルノー、シトロエンに割り込む存在が出てきた。トヨタとダットウ Datsun 日産であり、オートバイでは私が着いたところほぼ100%と言えるくらい日本製だった。HONDA, SUZUKI, KAWASAKI, YAMAHA ばかりだった。歴史的な植民地カメルーンというフランスの庭に、モータリゼーションでは、日本製が大きく割り込んだ。カンボジア人には一言もしゃべらせず、フランス人技師は自分の鬱憤を晴らし続けた。いやな構図だった。フランス・カンボジアという旧宗主国—被植民地が「植民地親子」にさせられて新興工業国・日本を揶揄するという歪な構造である。世界の現代史が、フィールドの個々の場面に登場する。場面から長い歴史と地球の政治経済の骨格が読み取れる。

フィールドワークで最初に疲れるのは、必ず若者—計量的エネルギーと「文化体力」

瞬間体力や腕相撲的な力で勝る若者が。最初に疲れパンクする。老齢のほうは、瞬間エネルギーを出す場面ではシンドいとしても、結果的に泰然と、むにやむにやと難なくすごしていく。これはなぜか。老齢者や中年者は経験を持っている。対処すべき広い出来事値を今まで獲得してきた。アフリカのような異文化の社会では、なおさらである。だから、力を出す場面と抜く場面の見極めも早い。意識的にも無意識的にもである。「ズルい」。判断が効く。言語的にも、習慣の上や気候の上でも、異質や突発に出会ってきている。だから、消耗しない。自分の手持ちパターンの応用をはめてみる。それで失敗しても、微修正する。力づくではない、柔軟さや

「いい加減さ」がある。

他方、若者はどうか。若者は、すべての場面で初めての出来事に会うようなものだ。そのひとつひとつに、100%ときに120%の体力と知力と創造力でぶちあたっていかざるを得ない。その場面、場面の出来事の一つひとつを、特異な出来事として出逢い受け取り、これに正面から交流、咀嚼、コミュニケーションして、普通の出来事にしていくしかない。質を生きる。これを経て、新場面が身体化される。こうして、異文化の一つのフェイズを我が物にする。疲れることは、その代償であり、若者の特徴でもある。ここに、ズルさと怠けを挟み込むことを知らない。逆に、全ての場面に驚き、興奮する力がある。所与のものとして絶対量が保証されはしない。一個一個の質を咀嚼して行って、量に至る。

ケインズ論に反対した経済学者のなかで、ヒックスは権力に繋がる所与の力を意識せずに論じている（第4章参照）。またそれが自分に既に付与されていることの意識が薄い、と理解する。意識できるときは自らの優位を表に出さず、実は勝ち誇れるぐらいの安全を得てそれを密やかに確認しているときである。ヒックスと“bloody frugal”と呟くロンドン・コックニーとの関係がそうだ。イギリスとアフリカの関係がそうだ。地球の南北の不平等は歴然とある。それを政策の中に強くつないで理論化したのケインズだった。ハイエクは、可視化されない不平等是正の、経済要素の連関構造の大理解と雇用につながる平等テーマとの関係は周縁的に把握していても、問題を顕在化させるだけの理論化動機を持つてはいなかったと理解するが、経済事象の一つひとつに、ケインズ論の一つひとつに、ハイエクも高英求も、正面から対峙している、その学的営みは、ケインズの誠実と同じような、フィールドワークの若人の情熱に結びつく、きっとホームランを打たれたこともある直

球を見る。研究の情熱、学問の真摯、を思い起こす。

大学のなかで教育という若人との対話は、実に意義ある。だが、それは、自分の芯に裏打ちされたものでなければならない。自分が何を研究し続けてきたのか、絶えない自分の努力の連続はどこにあるのか、自分の置かれてきた位置は何か、何を鍛えてきたのか、それにどう面してきたのか、それが率直に研究の中味として出る。お前は何者なのかを表現する行為が研究である。文章の髣髴を分け入って時に判らず時に打ちのめさを繰り返し、構造化されて理論に至る。その体系の縁取りを掴み描けるようになったからこそ、個別行動の意味が以前より余計に詳細にのぞけ判る。そうだからこそ、学問という儲からない対象の中身と質に、どれだけ時間と愛情とエネルギーとひいてはお金とを費やしたか、が問われる。研究というのは、やっただけ見合って返ってくる、やらなかっただけ後々自分を虚像化して生きなくてはならないその応答的真実は、フィールドワークの失敗・修正・再実施・肉付け・確認・構造化・再び詳細への連続化による文化体力とメビウスの帯のように連なり繋がっている。

社会政策や理論は、この「構造化の後の詳細や民衆生活や周辺些末」に再び帰って検証する「思いの敷衍化」つまり自他の普遍化が込まれていなくてはならない。高英求に、あらゆる境界を越えて生活子細に至って結ぼうとする、国家を越え民族を越える境界相対化と生活共同の「民」（たみ）の湧出化の熱い学を見る。物理体力が文化体力にメビウスの帯のように表裏でつながる。量と質が呼吸して表裏で結びつき、量が作りだす構造を質が体現しまたその構造に抗いつつ生きるその個々の至福に届くような、ネーション・ステートを相対化して国境を越え、ネーション・ステートが規定する「民族」共同体ではなく、生活共同体としての民の福利が

ねに思い焦がれられるような、どこにいるあなたでも「あなたは私だ」と言い得るような結びの包摂を高英求は学の中に為している。

松田素二が言うように、国家は民族によって相対化しなくてはならないと同時に、民族もまた生活地平によって相対化されなくてはならない⁽³⁾。異国の地を敬してその民になりたいと模索するアフリカ・フィールドワークと、国境を相対化し「中心—周辺」の周辺の民とその外縁的困苦を共有して脱しようと伴走する望遠施策の経済理論とは、根底の「構え」において響いている。

ここに示したような、ノウハウを織り込んだ粘着力を、私は「文化体力」と呼ぶ。高齢者は「文化体力」がある。フィールドワークは、物理的な体力ではない「文化体力」をはぐくむのである。同一文化にとどまっていたても、そこで育つということは、異文化体験の連続である。人生は、異文化へのフィールドワークと呼び換えられる。しかし、60歳70歳となった私が、なぜ「体力」を持ちえたのか、再度問う。それは、私が若い時に、アフリカの初場面や新事態や異文化の一つ一つに、120%にも及ぶ力でぶちあたり、疲れ、へちゃばってきたからである。そこで、横道への狡さで対処しなかったからである。私には、その時、その狡知を知る由もなかった。瞬時短期の物理体力も意味がある。長期の文化体力も意味がある。狡知は、量を時間をかけた経験検証してきた質の深さの蓄積によって醸造され、その量は質の中に正負の反映の形でミニアチュアとして堆積している。その時代時代を生き、特別な地の文脈を呼吸し、制度のリズムを生きる。吟味・検証のない量だけの把握は、だから暴力になり得る。量から質を捉える意志、質から量を作っていく長い覚悟、量と質それに短期と長期の映し合う往還のなかに、リアリティの発見と構造的安寧と個人の福利の充足が、共鳴する。文化体力の獲得は、真正面でそのア

フリカ異文化の新事態を受け止め続け、シンドクとも結果的に「免疫」をつけ続けたからにはかならない。それは私が、またはフィールドワーク実践者が、貨幣論をフィールドワークした高英求が、特別のことはしたのではない。普通に生きてきた、ということである。

こうした視点から体力や定年そして量や質を考え直してみると、「おばあちゃんの知恵袋」がいかに尊いのか、見えてくる。何が現在の知で何が不要かは、単なる物理的な力のボリュームでは測れない。また、時代に合致した、時代に外れた、という観点からも文化体力は生まれない。すべて、その経験は、活きうる。すべての人の生きざまは、価値である。埒外もすべて枠内として生き得る。すべての泥の経験は、次代への光の輝きである。個々の、子細な、些末な、生き方の一つ一つが、社会にとっての分厚い「文化体力」のレパートリーを構成し、蓄積し、支えている。この観点を取ることによって、全ての人の生命が、社会を照らし、社会と呼吸し合うことができる。「物理体力」の有が現役、無が定年ではない。「物理体力」も「文化体力」も、欠かせない「体力」なのである。「物理体力」と「文化体力」が交叉することによって、短期と長期が、老若が、「中心」と「周辺」が、強弱や濃淡を超えて、異質的経済構造を等質的トラクターで踏みならすことなく、一つ一つ意味ある「経験の生」として、社会を、歴史を、不平等を意志をもって正し繋ぎつつ、紡いでいくことができる。

アフリカでは、「恍惚」の老人は、見当たらない。老人のボケという現象にまず出くわさない。幼少も中壮年も老年も、それぞれ社会に必要とされている、という感覚があるからだ。例えば、ケニア・カンバ社会では、幼少に性教育を施すのは、高齢者のはっきりした社会的「役割」である⁽⁴⁾。期待されているのだ。しかも、世代をめぐるマナーや習慣を発達させている。

アフリカの多くの社会では、人は自分の同一世代や祖父母世代とは、比較的親しげな親和関係に入っているといわれる。冗談も気軽に言い合える。相談に乗ってもらいやすい。だが、父母世代とは、礼儀作法のしっかりした緊張関係に入る。直接に財を継承したりする関係でもあるからだ。つまり、ここでは、老世代、若壮年世代、幼少世代をいつも意識し合うメカニズムが働いている。社会を構成する、すべての世代が、相互に照らし合って、意味を持ち合うわけである。

私たちが当たり前と思っている「定年」という「引退概念」や福祉という「支援概念」も、相対化されなければならない。アフリカにおいて、老人は威張っていることはありさえすれ、助けるべき「福祉の対象」では、まったくない。アフリカにおいて、ほとんどの社会で、老人は、賢者として、知識や方法を授け、ときに意思決定に何らかの形で関わる存在である。老は、尊敬される存在である。カメルーン・バムン民族のように、アフリカの民族語で「若い」を「小さい」という形容詞で表現し、「老いた」を「大きい」で表現する民族がある。老は、力の不十分や衰退や欠損ではなく、その逆なのであり、力の充溢なのである。「大きい」。コモンズ論には、解放されるべき、平等がもたらされるべき人間の範疇の問題が存在した。他の人種は、救済対象に入れてまず良かったが、「黒人」は解放が早すぎた、というコモンズの認識も知った。誰を人間と認めて枠内に入れ、だれを救済対象＝平等化対象の埒外に放り投げるか、のなかでの人間普遍性に限界があった。だが、アフリカの認識論は、この救済、解放論さえも、その啓蒙前提から覆し、人間存在のより一層高い普遍の姿を求めている。老は、文化体力の持ち主であり、他に力を与える存在なのである。ヨーロッパ的認識の狭さを、相対化して乗り越えている。

日本にも、よく見れば、こうした知恵の活かしあいがある。日本の代表的な祭り、京都「大

文字五山送り火」を支える人たちにそれが見られる⁽⁵⁾。大文字の山焼き行事には、山を松割り木を担いで登り降りする体力が要る。これを行うのが、左大文字保存会の青年・壮年層である。老齢になると、保存会を引退し、「隠居」して金閣寺不動講社の宗教活動に入る。山を激しく昇降する体力は、なくなるからだ。だが、この不動講の成員たちも、大文字の日には、火の行事の材料となる護摩木を用意する。そして、保存会の近くを通ると、若年層や壮年層の人たちが老いたる不動講成員に恭しく挨拶する姿が見られる。そして、このとき、一言二言のねぎらいやアドバイスの言葉を老齢者は贈っていく。

定年を迎えても、社会的な役割とそれへの期待や尊敬のまなざしが働くかどうか、が重要なのである。趨勢を物理量ではかつては判らない次元がある。中味を問い意味を問うことが、生活の意義の重さを知る方法である。生活者にとっては、むしろその個々の場面の、個々の出来事の充足を味わって生きている。至福の源泉は、腑に落ちる納得、承服、是認、そのことの中味の共有・共感である。「老人ホーム」にはいつていたある老人は、「慰問」の若者グループに静かな怒りを表していた。若い物理エネルギー量に老が慰められるのではない。そんなことは求めている。小さくとも出来事の意味が人を充足させるかどうか問われる。「何かを与えて来るのではなく、何かを学びにおいでよ」と老者は言う。こうして生活の南北構造は、物理量の大小は、相対化される。人は施されて生きているのではない。欠損を中心から与えられて充溢するのではない。元々、当然のこととして、共通地平のスタートアップに着く。それを人権と呼ぶ。その「構え」を高英求理論は持っているということである。人は他者や社会にとって意味ある存在となりあって、いつも心に張りをもって、創り合って認め合って、生きていくのである。

8-2 流動者がおこなうフィールドワーク

グローバリズムの地球規模移動から人・モノ・こと・金（カネ）の移動を考え、短期流動性人材と長期流動性人材を、高英求理論にレゾナンスをもって照応し、試論として措定する。そこから、フィールドワークを考えてみる。人がその地で長期流動性人材となっていく過程を注視する。上記のようなフィールドワークの異文化の獲得過程がある。その地の「雇用」や発展に役に立てる存在、いてほしいと地元と思われる存在にいかになり得るのか、が問われる。同朋としてその地の価値観の深さとその地の普遍性・合理性を発信して世界と交流するメディアーター仲介者にいかになっていけるか／くれるか、を問う。欧米に「追いつき」経済「中心」となった日本と、「周辺」アフリカとの関係・交渉を問う。

流動性人材は、ある人にこの流動性人材がたくさん付いていたら、ネットワーク力・社会関係力・情報収集力が増すことになり、この流動性人材が時間が経ったあかつきに自分を助けてくれたりサポートしてくれる支援者となりうる。つまり、困窮時や困難時を突破する「時間を稼ぐ」価値、耐え忍ぶ価値の共助力として将来に機能する。モラル・エコノミーである（杉村和彦「消費の世界とアフリカ・モラル・エコノミー」『アフリカ研究』70号、2007年、119-131頁参照）。社会関係が将来の経済力となって生きて返ってきうる。価値尺度をもち、他価値に交換できないが、時間を延ばしたり思いもかけない価値や機能をもたらしてくれる可能性を有する。時間を伸ばしたまま保管して、必要時に機能発揮する保管機能がある。自分にはないその人が持つ他世界価値をメディアートしてもたらしてくれる可能性がある。交換価値に類する力がある。お金には意志がないが流動性人材は意志を持って、惚れてくれる。文化的に心理的に感動すれば、思いもよらない量と質

の財が届けられることがある。意志はやはり大事なのだ。その地にいる友人は大事である。近隣社会で関係を持つ流動性人材がたくさんいれば、その保有し合いは、単なる累計を超えるプラス・アルファの超大な力をもたらしてくれることも多い。関係の関係が力になり、関係の有機的結合もむすびあう。社会形成である。しかも社会は歴史を蓄積している。こういう保管価値の機能もある。その地に根付くこと、その地の役に立つこと、役にたち合うこと、社会の一員になることが価値なのである。その地の文化・慣習・価値観を学んでいく行為は、そうした流動性人材を育てる。両方の文化が活かされる、という価値の結合・創造がある。流動性人材のなかに異なる価値が併存し、混淆し、新しいものが生まれる。元々の移動前地にも移動後地にも、新価値が伝達される。

中心が周辺を見下す進化論ではなく、文化相対性からその地の価値基準をリスペクトして学んでくれる流動性がやってくるなら、それは、その地に大きな貢献を成し、また、元々の始原地にそれを伝えてくれる普及力・伝達力にもなる。短期流動性人材も良いが、長期流動性人材ならより良い。その地に留まってくれば最も良い。その長期展望のなかで、新しい流動性人材を引き連れて来くれるのもまた良い。旅する土着者フィールドワーカーはそうした位置づけをもつ⁽⁶⁾。

高英求の貨幣制御理論は、短期流動性資本の過度の自由奔放性による個人の欲求充足と、国内または国際における長期的な産業育成や雇用創造による階級差是正の動きとを、長期的流動性資本の定位によって作動させて共に充たし、そこに植民地化を経て歴史を背負う「中心—周辺」格差を直視是正して、抑制機能の効いた、平準化の方向に向かわせる理論化を立てようとするものである。この政策理論や経済理論のなかで制度や権力のもつ機能を、個人の個別の行

動から見直してみると、アフリカ人はこの短期長期を、国内施策や国際制度のどちらにも頼れなかったから、制度や権力からの抑制とバランス維持ではなく、個人のレベルで充たし生活している。そこに浸って生きること、機や利あればすぐに動くこと、ともに「本当」「真実」である。それを、私は、「アフリカ人が持つ動棲共創の論理」と呼んでいる⁽⁷⁾。

アフリカ人は、自他広狭の文化の中で生きていくスキルと価値を村や町の地域社会の日常生活の中で社会化されて生きている⁽⁸⁾。アフリカ社会の日常、毎日が、今ごろ日本SDGsで謳っている「多文化共生社会」そのものである。それを実践しないと、自分も生きていけない。アフリカには54の国家があり、そこに800もの言語や民族がいる。アフリカ人は、英語仏語など植民地語も含めて、アフリカ中どこに行っても個人が4～5つの言語を話すのは当たり前で、自分の価値基準で生き、より広い自他を含む価値基準で生き、より普遍度の高い広い民族際社会の価値基準で生き、「国際」にまがうようなinter-cultural 範域の価値基準で生きていく、複数複合の生活スキルの持ち主である。日常にいわば「国際」がある。それは、アフリカの伝統的な民族地域社会で培われたものであり、村や地域社会の生活が、多民族が錯綜交流する多文化・多宗教・多言語・多価値の「国」際「文化」際社会だからである。

斉一性が強いと信じこまされている「田舎」的な日本と違って、異文化や多文化に慣れている。共通文化だとアフリカ人が日常規定し、その価値意識から想定しうる広狭のせばかりの柔軟度が高い。だから、棲むことも、移ることも、アフリカ人には真実であり、どこも自他からなる「共通文化」の中にあったり、そう想像力を働かせることができる。ともに柔軟な共通文化生成のスキルと実践の中にあり、その想像力が可能にする自他共同性の中にある。国

内、国際の権力が公助として制度化しないのだから、その未整備のなか、アフリカ社会が自助、共助を促し個人化し、伝統化してきたのは、しごく自然な合理道筋である。これを権力や国家体制から見れば、そのように民衆や各人に自助共助を強めないような制度設計が求められているといえる。

いつでもやってきて、ここにずっと居座る覚悟と構えをもってその生活様式を実践し、アフリカに企業派遣される日本人ビジネスマンがいつも東京を見てこの地を「愛さず」浮いたまま時を漫然と過ごしているのとは違って、自己をこの地で日常化し馴らし、棲息者となり「定住」しているのに、いつでも「出ていく」流動自由性は留保している。この長期短期を同時に共に生きる構え、技術と思考が、アフリカ人にはある。棲みつくのも本当の真実、動いていくのも本当の真実なのである。ここと他世界を共に生きる力、深まる覚悟も動く覚悟もある。

もう一つ留意すべき点がある。お金と意味の関係である。金銭経済が世界の隅々にまで浸透し、その量もグローバリズムとネオリベリズムの時代となれば、その浸透度合いも大きい。生半可ではない。アフリカの伝統社会にも大量の資本が入り込む。「開発」がその文化を消してしまわないかどうかは、大きな問題である。伝統文化が金銭や資本主義にとって代われ、伝統物は消え、そしてその「開発」援助はうまくいかなかったとして、その新しい財保有手段や農業産物の倉庫も維持できず、コーヒーならコーヒーといった新しい財自体も消えてしまう。元の伝統農耕品はもうない。カメルーンのバムン社会で起きたコーヒーブームと、構造調整後の衰退がある⁽⁹⁾。短期流動性資産の他国での暴力そのものである。

そのことを、ジンメルは、農民の土地の商品化を例に説いている。その土地は、農民にとって単なる資産価値という以上のまったく何か別

のものが隠れひそんでいた。それは、農民にとっては、有益な活動の可能性であり、関心の中心であり、人生の指針を定め得る生活の内実だった。そして農民がその土地の代わりにその価値を貨幣で所有し始めた途端、それらのものは失われていったのである⁽¹⁰⁾。

いろんな文化事象や伝統行為が、その意味あるモノの贈与・交換によって意味が伝達されていたものが、お金でことを済ませお金で儀礼行為を行うようになってくる傾向もある。文化の意味をもっていた諸行為が、その意味を運ぶ依り代や象徴ではなく、意味を剥がされ漂白されていく。意味の剥奪がお金によっておこる。そこで、アフリカ民衆社会はなにをするのだろうか。なすがままに文化変容がすすむのか、が問われる。フィールドワークという外来者のその地への行為は、意味を獲得に来る行為である。フィールドワーカーという外来者の出現が、文化を学びつつ文化を破壊していないか、は常に留意されなくてはならない。自他が接触・交流しているのであるから、この留保と省察・自己検証は常に要る。その連続を継続し、歴史化する長さになることもあり得る。流動性人材は意味獲得・伝達者なのである。意味略奪の暴力から意味を取り返してくれる力強い助っ人になりうる。その行為の分析は、意味がある。フィールドワーカーは、価値保有者となり、空間も跨ぎ、時間も留保したまま跨ぎ将来に延ばせる。こうして価値伝達者になりうる。また、儀礼や歴史を背負う民俗概念をお金で漂泊されてしまった、その社会の意味再獲得の行動も意味をもつ⁽¹¹⁾。

野元美佐(平野美佐)は、カメルーンの首都ヤウンデと故郷バミレケの首長領の間で、人々は、「貨幣→生活」という作用方向のみならず、「生活→貨幣」という逆方向の働きかけも存在することを述べる。そして、貨幣は一方的に生活を変えてしまうことはできず、逆に生活の方

からの働きかけが、人びとによる内容の書きかえや、新たな意味付けを生むことを論じている。それを、松田素二の、都市民衆のイニシャチブによる「都市を飼い慣らす」というターミノロジーから、「貨幣を飼い慣らす」と表現して、一般化された媒体で空虚な形式である貨幣から、一般性や空虚さを取りのぞくことが行われ、生活の側から貨幣に「書き込み」がなされることを論じている・具体的には、首都ヤウンデで手段を問わず稼がれ集積された貨幣によって、故郷のバミレケ首長領で、会館や寄贈的な公共建造物が建てられたり、共助の民族的経済デバイスであるトンチン無尽講を通したりすることによって、無味乾燥なものや悪い意味から「貨幣が良いお金」へと意味づけられる、と論じている⁽¹²⁾。

ハッチンソンもまた、貨幣を飼い慣らすアフリカ民族の動態を拾い上げる。東アフリカの牛牧畜民ヌアー社会では、1980年代に牛が商品化されたという。牛がマーケットで売買されただけでなく、結婚のための両親族を繋ぐ神聖な婚資を、伝統的で神聖な牛でなくとも現金で支払うことも起こっている。ここでは、単なる牛の商品化ではなく、「商品の牛化」が進み「貨幣が牛化」された、という。婚資が現金で払われるようになったことから、5つのカテゴリーが生まれた。1番目は花嫁結納による「娘の牛」である。婚資としてやってきた牛だから、親族の広い権利義務に規定される。2番目は、「お金による牛」で、購入した牛であり、親族による権利・義務は皆無である。3番目は、「仕事によるお金」で牛以外のヤギや他の手段で入手したお金で、どう使っても良い。4番目は、「牛によるお金」で、牛を売って得たお金であり、このお金には親族や集団の規制が働く。3番目のお金なら、市場で酒を奢れと寄ってくるが、4番目のお金には牛の規制がかかっており、まったく寄ってこない。5番目は、「婚資のかわ

りに支払われたお金」であり、このように、牛と貨幣の等価交換、つまり商品化がおこっても、手を付けられない意味重い牛や意味重いお金が生み出されている。意味の書込み、意味変換も、伝統牧民生活の価値づけから行われ得る。「お金による牛」を婚資に使えば「娘による牛」に変換され、その「娘による牛」を売れば「牛によるお金」に変換される。変換の軸を占めるのは、伝統民衆なのである。こうして、意味を変換して、意味の書込みが牛にもお金に主体的に出来るようになる。ハッチンソンは「貨幣交換の実践と原理を、ヌアーの親族と共同体の絆により引き付けて合体させ」伝統を合成の中で継続強化していると論じるのである⁽¹³⁾。阿部年晴もまた、村の妖術が資本主義的都市世界で、資本ばかりの都市に対抗する行為として村伝統が都市的コンテクストの中で、むしろ意味を再定置されて再登場することを論じている⁽¹⁴⁾。

移動者・流動者のアイデンティティや尊厳を保証しなくてはならない。同時に、その移動先のアイデンティティが明確に意識され、その地のシステムを尊敬し文化や制度の違いをリスペクトしあい、個人自体の、ファミリーヒストリーを背負った家族史の中や、例えば陶磁器地に生まれ育った地域集団の中の、準集团的個人と準集团的個人の関係、民族や国家という集団枠組みの伝統や価値観を背負った集团的個人と集团的個人の関係というように、関係や交流のあり方が多重化し錯綜する。つまり、多くの価値を背負い得る。意味が多義的になるということである。この多重の意味を背負った流動者同士が出会い交流し意味を問いあうことが大きい。人と人との出会いによって多様な意味が内在化して生成されるということである。フィールドワークは、最初は見えないこの多義性を学んでいる。

むすび 民衆福利にむかう高英求貨幣理論とフィールドワーク認識論—要長期のプロトコール修得とあきらめずリジリエントな自他平等化

民衆自主力と権力・政策側の調整力—権力行使の絶対的力は、常に民衆の至福に向かっていなければならない。金持ちや資産あるもの、資源の潤沢なものは、いつでもどんな状況でもやっていける。政府や権力中枢が規制をかけるとすれば、それは、いつも民衆の福利・幸福を目指した視点を持つものでなければならない。高英求がヌルクセを捉えて言うように、累進課税や国際的補助金を行うかは、経済の動向から自然に生まれ出てくるものではない。意志の問題である。勝ったもの勝ち、や財ある者がさらに有利になるような、勝利増幅装置は要らない。濡れ手で粟を掴む秘訣も要らない。僥倖の当たたりも、その逆のリバウンドを想起させる。長期の時間を賭けた営為が、いつてみれば民衆の日日の営為の積み重ねが実るような、また貧困地にも雇用が生まれるような、それへと希望を実感できる政策でなければならない。時間を賭けた蓄積、労力、エネルギー、熱情、思い、愛そうしたアタッチメントが実を結ぶようなバランス装置が発案されなければならない。時間や空間の独自性をスキップしてしまうようなプロセスは、強く戒められなければならない。短期流動性には常に警戒の眼がひかっているなければならない。「ここ」と「今」のアウラを積み重ねて、初めてことが成るような手続きが尊重されなければならない。時間と着実をスキップしたような、狡猾なズル抜けが奨励されるような事態と政策は、諫められなければならない。慎まれなければならない。金持ちが金持ちを生むような制度は、どこかで亀裂が生じ、その慣習は必ず矛盾をうみだし爆発に至る。私達は、自

然の摂理からは、東京の資本力ばかり気にしている電力会社や、文化の摂理からは、ニューヨークの世界貿易センタービルで、そのバランスを欠いた矛盾の結末を直近の現代史で知っている。

人間存在の交流が、どれほど文化が違えども、可能となっていくのは、時間・エネルギー・熱情・思い・愛情・ひいてはお金がそこにかかっているからだ。自分がその営みに要した時間と弄した情熱を賭けてきたとすれば、その人と人を結ぶ実りは必然的にお金がかかっていることも多い。もし、個人的にそうでないとすれば、その熱情の普遍性に、他者をも幸せにし得る自己性に、他者や人々が共感をもって、寄り添ってくるからだ。その足し算のもたらす集積は、評価の掛け算となって累乗を呼び、数え上げれば、実は大きなお金が、それに相当するものがかかり集積している。それが思いの蓄積の真実というものである。参集したみんなの時間が経験として集積される。だから、伝統は尊い。いっぺんに騙して稼げる慣習はない。何かを省略した奇策で得られる習慣はない。私のフィールドワーク「文化体力論」はそのことを論じ、短期流動性資産はこの奇策になってしまう危険性あることを、高英求は理論化に埋め込む。それぞれが持ち寄る要した時間がそのまま正直に映し出される。個人的利益を短期に保証するシステムだけではなく、自他の納得と賛同と幸福が自分にいずれ帰ってくるような時間を経た社会経由の自己形成装置が長期的展望のもとに装置化されなければならない。こうしたシステムは、「習慣」「慣習」「他者への礼儀」コーティシーとして、社会の中に潜在的に無意識に存在していることが多い。これを活かさない手はない。また、それにはプロトコール、礼儀や、手続きや、儀礼的な前技や、決められてその皆が納得する助走が要る。そこに当該している他者の承諾が要る。

その意味で、通過儀礼の持つ意味は大きい。お金を200万、1000万円だすといつて、成人にはなれない。し、3000万払うから合格してくれ、は聞き入れられない。大学に入学できるものではない。量によってその中味は贖われない。至福の極値は、時間を賭けた行為蓄積がもたらすものである。若者は拳手空拳で臨み、経験という時間の蓄積行為を得て、乗り越えを実現する。新しい世界を拓くのに、時間・エネルギー・熱情・思い・愛情・労力・お金の蓄積が決定的に枢要だ。1日、365日、その繰り返しの蓄積がなければ、突破はありえない。愚直な繰り返し、意味をもつ。社会の中で、この愚直を高く評価するシステムがどこかに用意されていなければならない。スポーツでも、この身体を鍛えた愚直が評価される。

『貨幣の制御』が説くところとの一致でいえば、ケインズを取り上げた高英求が論じるように、人為的に膨らまされた流動性は、往々にして、次の危機の原因となる。雇用を生み出すには、重化学工業や農業を支えるには、長期流動性の資産がいる。短期流動性では能わず、長い時間が、結局、必要な絶対量をももたらす。時間をかけて待てば、その分多くの人や他者がじっくり滞留して量を造り出す。その間の「そこ」滞留性、その意味創り、トpos化の蓄積が生まれ出る。流動性資産の国際移動後のその地でのトpos化が重要である。その土地の独自の意味や由緒や歴史再読が生まれてくるからである。量と共に質や意味も生み出す。意味で充ちた絶対量が実質量として、集積する。時間を賭けて今を先や未来につなげ、過去から今への幅が実ると、「そこ」への意味付け、体験、他者の寄り合い、も多くなる。逃げない他者が寄ってくる。短期が長期に延びるオリエンテーションが出てくる。意味や質や関係は、風評や評価となって、その間の時間エネルギーが一定量の凝集を生む。短期と長期を組み合わせ、開放性

と自由が増しすぎたネオリベリズムの資本主義状況のなかでの「中心」と「周辺」の国内的・国際的格差と歴史矛盾をみつめその是正を意志化した営みと理論化が求められ、そのなかで自己と自他を組み合わせ、つまりは個人と社会と組み合わせ、ともに多様に創生していく思想が求められるのである。

この多様に生み出される動態から、高英求は、価値尺度、交換手段、価値保存手段でありつつ、経済成長を刺激しながら危機を準備し、自由と解放の手段でありながら反動としての抑圧への契機ともなる貨幣の多義性を掴みなおし、その動態分析のための「流動性の制度依存性」と「流動性の権力依存性」という新しい枠組みを構えて、世界の襞にいる個々の民に向けてその共同普遍を届けようとする深い思惟に底支えされた新しい経済思想の理論化を成した。

貨幣もフィールドワークも、この多義性に依って立つ。この多義を捉え修め包む「構え」と「モノの見方」に、人間の自由と共同が生み出され保証されていくことを信じて疑わない。

<付記>この研究は、科研基盤 C19K01209、基盤 B21H00651 の助成によるものである。

注

- (1) 関根康正は、文化人類学が「下からの視点」とホーリスティックなその社会の詳細をすべて包むほどに有機的に生活詳細に分け入って記述する方法論を取り、今まで人類学が対象としたような定住的、固定的静態ではなく、移動・遊動からなる都市民衆ストリートの矛盾や動きをとりあげ、しかも、グローバリゼーションによって活性化される社会「勝利するローカリティ」ではなく、抑圧され駆逐される「敗北したローカリティ」の救出に照準をあてた研究をすることの意義を説く。関根は「メジャーストリートの暴力と排除に抗して一棄民される人びとの中へ」という表現をとっている（関根康正「ストリート人類学という挑戦」『ストリートの人類学』風響社、2018年、15－29頁、31頁）
- (2) 関根康正、同上。
- (3) 松田素二「国民国家型民族から生活共同型民族へ」『アフリカにおける部族、民族、国家、再び』第37回日本アフリカ学会学術大会シンポジウム要旨集、於広島県立大学、2008年
- (4) 上田将・上田富士子「カンバの冗談関係（1）」『文化人類学』40（3）、1975年、169－190頁、でケニア・カンバ社会が3～4世代がそれぞれの世代を意識し合い活かしあって、冗談関係と忌避関係を使い分け、各世代が活かされ、最上位世代は、冗談関係に入ることはあっても、根底で尊敬される存在であることが論じられている。
- (5) 和崎春日『左大文字の都市人類学』弘文堂、1987年、68－73頁。
- (6) 和崎春日「テンベアとダンイスカー移動アフリカ人の定住と放浪の論理」『季刊・民族学』176号、特集：隣りのアフリカ人、2021年、4－11頁。和崎春日「東南アジア在住アフリカ人の生活動態」『貿易風』11号、2016年、37－52頁。
- (7) 和崎春日「移動アフリカ人の動棲共創の論理－在ベトナムアフリカ人プロサッカー選手の生活原理を中心に」『貿易風』16号、2021年、34－51頁。
- (8) 日野舜也「東アフリカ都市の近隣集団－Swahili town, Ujiji の社会関係と社会構造」『民族学研究』33－2、1968年、によれば、スワヒリ都市ウジジでは、裏庭を共有して語り合い助け合う関係、道路を同じくする関係、モスク通りを共有する広かった関係、市場に行って多民族が交わる関係と、日常生活の中に多民族が民族際的に、文化際的に交流し、他者文化を知り自他の共通性を発見し、またイスラームなど共通機能のもとに自他が集まり同一文化者として生きるなど、広狭の多文化修

得装置のなかで生活していることを論じている。アフリカ人は、日常生活において複数の価値で生きていく「国際人」なのである。和崎洋一が論じたテンベア論も、テンベア放浪によって移動とそこへの棲み込みが日常生活の中でともに身体化することが明らかにされている(『スワヒリの世界にて』NHK ブックス、1980年、特に第2章の「村入り」について)。

対象化して、専門分化し資本とその専門によって打ち立てられた小宇宙と人工環境の都市的世界に、非都市的世界が再度、自らを再獲得しなおす手段として、妖術を使用して自己を定置している動態を分析している(阿部年晴「都市と妖術—都市論への一視点」『比較文明』5号、1989年、38—53頁)。

- (9) 和崎春日「カメルーンバムン王権社会のヤシ文化複合」『国立民族学博物館研究報告』特別号、2008年、でヤシというモノのもつ意味複合を示した。ヤシが日常のヤシ油やヤシ酒として食用にされるが、これが誕生、結婚、葬送の通過儀礼ら、王や家長の権力継承や、王と地方首長の関係など、政治社会関係も含めて、複合的な意味を保有している。このヤシ畑が開墾されコーヒー園になったが、構造調整後の経済不振や中心国イニシャチブによる価格決定のため、コーヒー園も不振でなくなり元のヤシ畑も回復されず消えてしまった。資金が集まって「開発」が進んだが、短期流動性資産の急速集中と急速引き上げによって、経済も文化も破壊された。
- (10) ジンメル、ゲオルグ「近代文化における貨幣」『ジンメル・コレクション』筑摩書房、北川東子編訳、1999年、261—291頁。
- (11) 小田亮は、一般化され平準化され漂泊された貨幣に、生活から逆襲がある。意味からの反攻があるといい、これによって、「私的な自己創造」と「公共連帯」とが両立するフェイズへの動きが出てくるという(「二重社会という視点とネオリベラリズム」『文化人類学研究』74—2、2009年、272—290頁)。また、顔という代替不可能なものにより、その存在の独特な位置づけがでてくることを、漂泊されない独自の意味付けとして論じている(「真正性の水準と『顔』の倫理」『グローカリゼーションと共同性』成城大学グローバル研究センター、2010年、247—271頁)。
- (12) 野元美佐『アフリカ都市の民族誌—カメルーンの「商人」バミレケのカネと故郷』明石書店、2005年、23頁、で、貨幣が空虚な形式であるからこそ、その内容に対しては、人々が書き込み、書きかえをする余地が存在する、と論じている。
- (13) Hutchinson Sharon E. “Nuer Dilemmas: Coping with Money, War and the State” California University Press, 1996, pp 85-87.
- (14) 阿部年晴は、都市—村落の格差を捉え、資本とそれによって作られたに都市と、お金が欠乏し自然自体と一体化している村落(非都市)との交流を